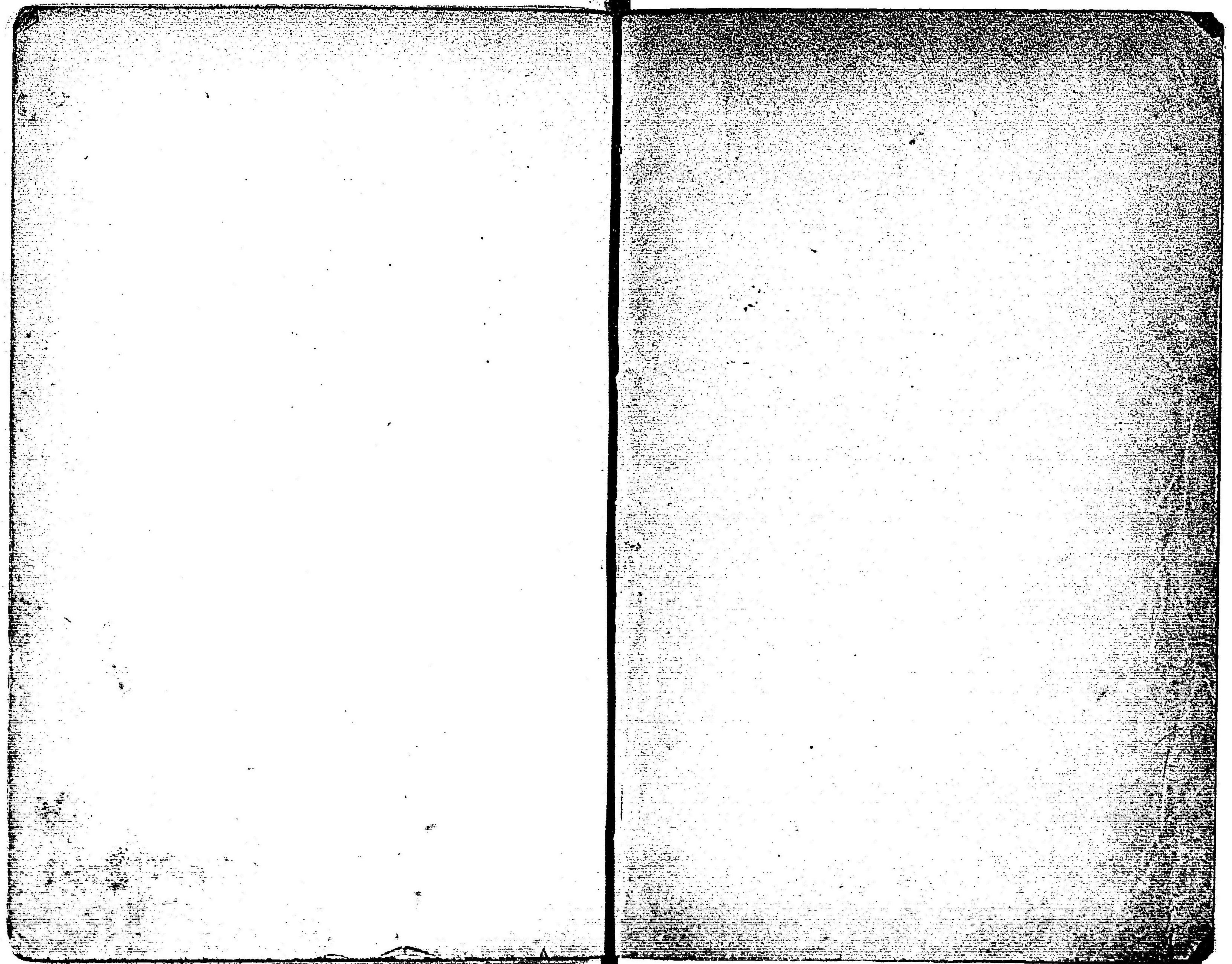


3
79

釋
學
成
語
解

秋
天
上

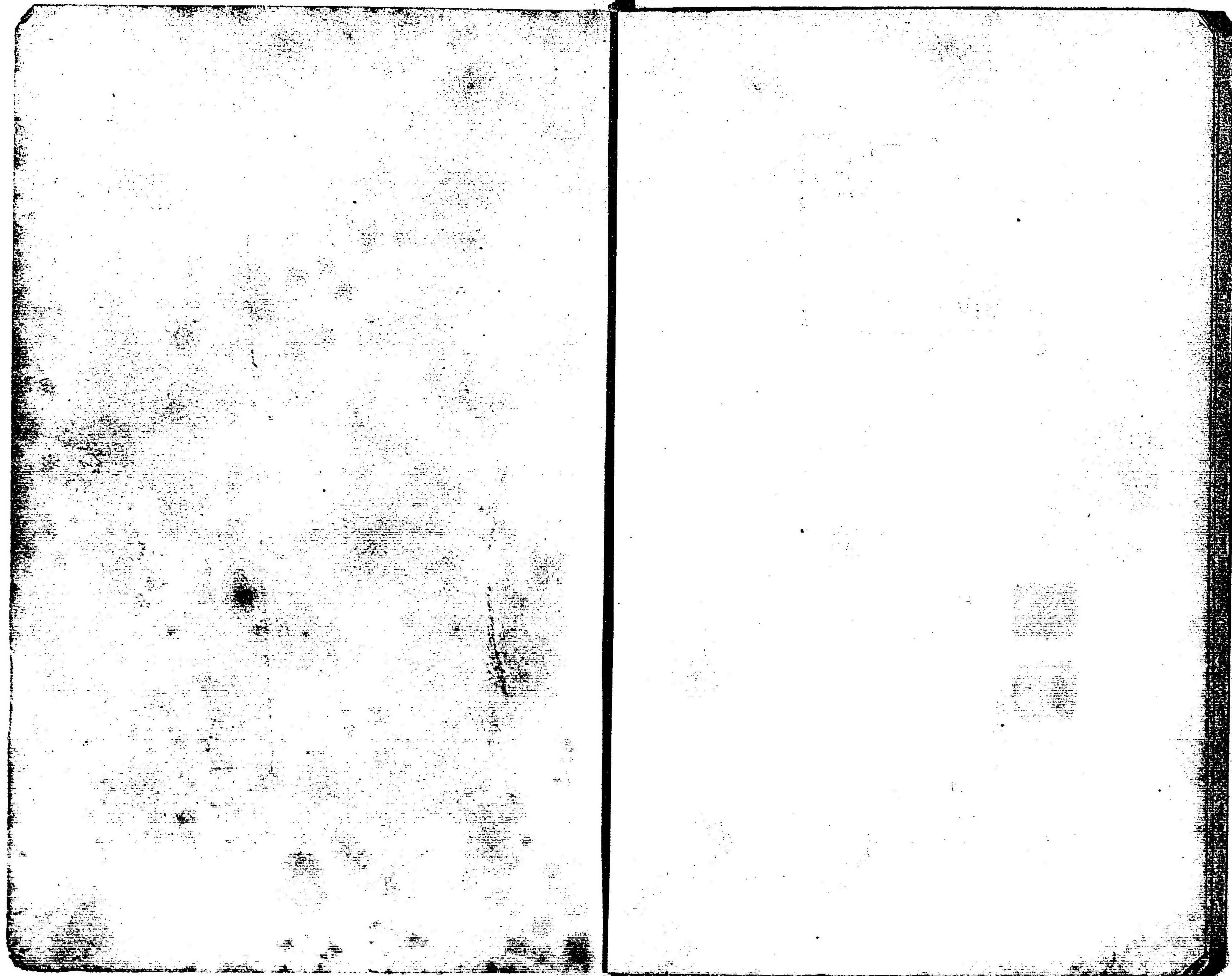


324-79

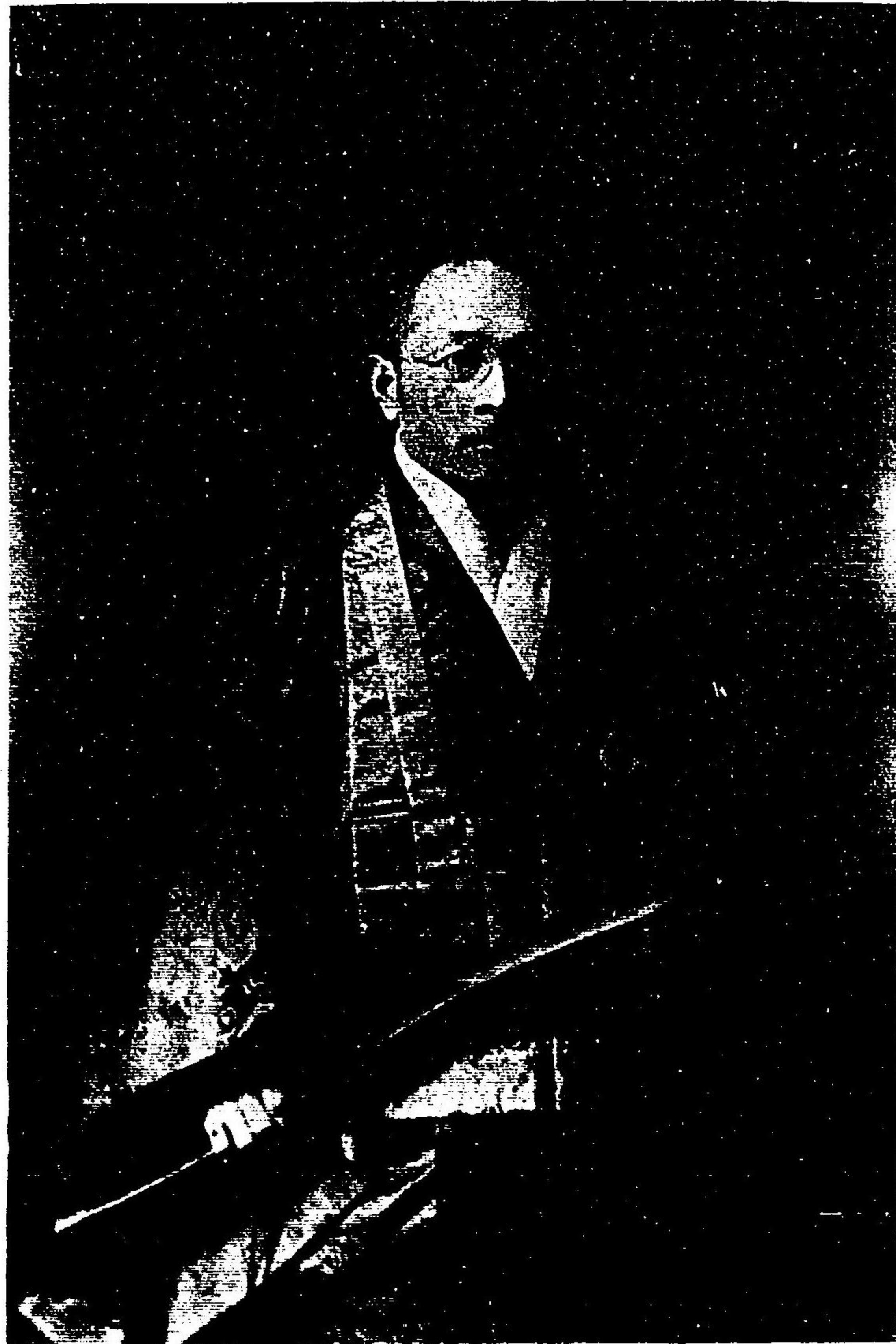


子安法輝





○簡字無似座 ○色梅白賞笑 ○顯幽遊理直 ○今古通風學



年餘有十二遊歴外海し飛に清、印、米、歐を錫一
像竹師恭元釋僧傑るあ概のむ吞を人氣意核奇論談

自序

禪學修道之要。只在見性而已矣。釋尊六霜之端坐。達磨九年面壁。皆莫非示這標榜也。若夫沒溺教相。尋言逐句。不知生死出離。安心立命之大事則。縱令諳得一代之修多羅。是所謂博識多聞。增長我見耳。僧寶分上無半錢價。然而從上佛祖。幾多言教。以存世者何耶。蓋經是佛語。禪是佛心。元無違背。苟具眼人受用則。諧談謔語。亦歸第一義諦。況佛祖言教乎。或能讀言教或讀於言教者。唯是由具眼與否耳。禪學俗語解。震旦

扶桑據列祖二十四流。語錄。記述。研究數箇年間。取
 要所纂。遂爲篇。引書百五十種。卷數二千七百二十五
 册。爲後昆欲行世。參禪之徒當讀之書。近世禪門之師
 家。誤熟語及講唱法。漫招青面漢之冷笑。徃々所見聞
 可惜許。一片婆心。編閑葛藤。畢竟屬徒爾。編者所希
 又何足云耶

明治戊申春於東都百花含笑處

入竺沙門支那竹林蘭若曹山釋元恭和南

凡例

- 一 不立文字の教が反て文字の爲めに縛せられ、遂に其生命を失ふに至つたは本を忘れ末を逐ふからである故に本書は卷頭達磨の人格を述べたのである
- 一 禪は生死を透脱するの修行であるが其生死を透脱する前に名利を透脱せねばならぬ其名利を透脱する眞最初に文字言句を透脱せねばならぬ
- 一 文字言句を透脱すると云ふも決して文字を取扱ぬてはない、古徳の語録を讀破して自己の所懐を人に傳へ後昆に貽すには亦文字言句を借らなければならぬが本末を顛倒せざるやうにせねばならぬ
- 一 本書は何の爲めに編集せしや即ち達磨の人格と同化し大寶鏡

三昧に入る爲めてある。寶鏡三昧を得て何の用をかなす、曾て榮西禪師は一ツの傳授流通スベキナシト又道元禪師は空手還郷、然らば本書は何の爲めぞ、畢竟天地一枚無字の書である。

一若人本書の文章言句を是非せば甚た敷愚物である須く一隻眼を開きて不讀の讀をなすあらは編者の満足する處亦何をかいわん

曹山釋元恭禪師

侍者謹白

諸錄引用目次

碧	巖	從	容	息	耕
錄	錄	錄	錄	錄	錄
傳	光	臨	濟	林	間
錄	錄	錄	錄	錄	錄
虛	堂	雲	門	高	峰
錄	錄	錄	錄	錄	錄
佛	光	傳	燈	應	庵
錄	錄	錄	錄	錄	錄
續	燈	中	峰	松	源
錄	錄	錄	錄	錄	錄
僧	寶	曹	源	破	菴
錄	錄	錄	錄	錄	錄
海	會	貞	和	楚	石
錄	錄	錄	錄	錄	錄
西	巖	立	沙	輟	耕
錄	錄	錄	錄	錄	錄

五祖錄	濟北集	護國論	正宗贊	普照錄	座禪儀	參同契	無門關	無準錄	蜜菴錄
成道記	夜塘水	空華集	十勝論	寒山詩	江湖集	證道歌	寶慶記	顯孝錄	石溪錄
宗鏡錄	見桃錄	寂室錄	沙石集	三體集	降魔表	葛藤集	東坡集	四家錄	了菴錄

槐安國語	博山警語	正法眼藏	曹山錄	普燈錄	祖英集	修證義	大覺錄	禪定錄	種電抄
雲臥記譚	圓悟心要	大慧武庫	應燈錄	無冤錄	夢窓錄	指月錄	隨聞記	嘉話錄	寶鏡記
雪竇百則	叢林盛事	人天眼目	巴陵記	傳心錄	擊節錄	護法論	正理篇	發微錄	雲笈錄

禪關策進	寶鏡三昧	羅湖野錄	百丈清規	人天寶鑑	祖庭事苑	高祖本記	敕修清規	江南雜錄	禪門寶訓
傳心法要	闡提記開	禪儀外文	山庵雜錄	大慧普說	尺牘雙語	徑山語錄	事文類集	法苑珠林	元亨釋書
枯崔漫錄	大光明藏	五家正宗	達磨三論	類書纂要	佛祖統記	文獻通考	冷齊夜話	高僧傳記	黃檗山誌

鴻山警策	荆叢毒藥	一華五葉	五燈會元	禪苑清規	禪家正脉	曹洞二師錄
宏智廣錄	大藏一覽	六祖檀經	徑山記綱	中峯廣錄	禪源諸軌	興禪護國論
幻住清規	毒語心經	大智偈頌	禪林蔬語	五燈巖統	天聖廣燈錄	傳法正宗記

外典引用

通鑑	史記
左傳	文選
唐書	晉書

公羊

穀梁

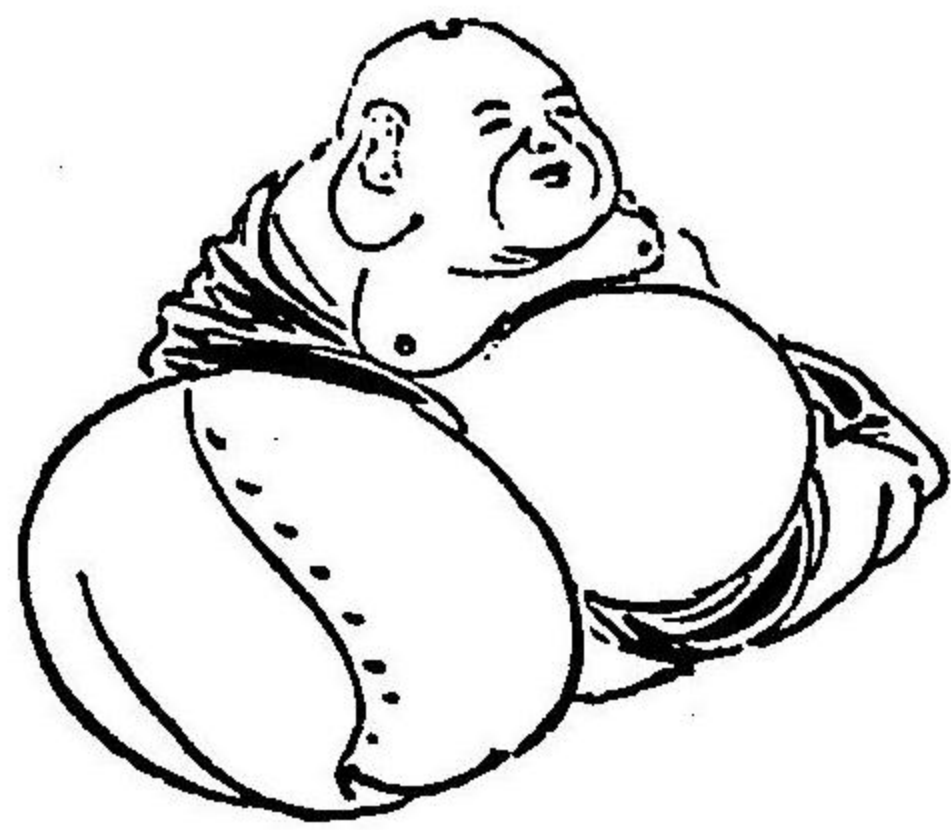
韻府

前漢書列傳

後漢貨殖傳

史漢高記

書原故事



禪學俗語解

禪の概要

曹山釋元恭禪師講述
侍者神山元透筆記

大なる哉 心や天の高きも極むべからざるなり 心は 天の
上に出づ 地の厚きも 測るべからざるなり 心は 地の下に
出づ 日月の光も踰ゆべからざるなり 心は 日月光明の表に
出づ 大千沙界も究むべからざるなり 心は 大千沙界の外に出
づ 其太虚か 其元氣か 心は 則ち太虚を包んで 元氣を孕む
者なり 天地我を待て覆載し 日月我を待て變化し 万物我を
待て 發生す 大なる哉 心や我止むを得ずして 強てこれを

最上乘 又第一義と名く 亦正法眼藏 亦涅槃妙心と名く
 然れば則ち 一切の藏經 古今の學說 打て併せて這裡に在り
 參學須からく這裡より入て這裡に出よ トハ日東佛心正脉の
 的傳 千光初祖榮西禪師の閑葛藤である 佛心とは何ぞ 大慈
 悲是なり

靈山一枝の正的 世尊これを迦葉に傳へられてより 歴代の祖
 師 心を以て心を傳ふ 即ち正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙の
 法 二十八傳して菩提達磨に至り 達磨支那に渡りて直指單傳
 の眞風禹域四百餘州を吹き 南北兩祖となり 五家七宗となり
 宗派は分れてをるが ソレハ寧ろ教義の區別でなく法系相承
 の差別である即ち參同契に 竺土大仙心 東西密相附 人根有
 利鈍 道無南北祖 靈源明皎潔 支派暗流注 と云はれた通り
 竺土大仙の正法眼藏涅槃妙心の正脈は綿々として傳へられであ

る 之を佛心宗と云ふのである
 佛心を會得するは 坐禪である 坐禪の要は 大解脱の正道を
 工夫するのである 一切の諸法は 皆この道より流出し歩々皆
 此道より通達し 智慧神道の妙用も此中より生じ 人天の生命
 も此中より開け 諸佛もすでに此に安住し給へ 菩薩も亦 行
 じて此道に入る 乃至小乗及び外道も行ずといへども 未だ正
 道にかなわず 凡そ顯密の諸經も此道を得て自證とす 故に
 初祖云く十方の智者みな此道に入ると示された道元禪師の辨道
 話に 諸佛如來ともに妙法を單傳して 阿耨菩提を證するに
 最上無爲の妙術あり 是唯佛に授け よこしまなることなきは
 即ち自受用三昧 その標準なり この三昧に遊化するに 端
 坐參禪を正門とせり トあつて宇宙の眞理を徹見する 最上無
 爲の妙術は坐禪にあるといふのである サテ禪は佛法の總府と

いふので 不立文字を標榜し教外別傳といふのである 何經何論によつて立つといふのでなく 一切法界悉く眞理の顯現ならざるはなく 宇宙の万象皆是佛理の説明ならぬはないといふので即ち 溪聲廣長舌 山色清淨身 といふた如く溪聲便ち是れ佛の雄辯滔々たる廣長舌である 山色そのまゝ佛の清淨なる應身であると觀得する上は 文字言句に傳へたる經典に拘泥すべきてはない 五百年來間出の禪として 名たかき白隱禪師は 三藏譯無語、誰人豈得聽、千佛縱出世、不添減一丁、と云はれてある 佛に於ても一ページも増減するべからざる 宇宙は無字の大經卷であるといふので 此一大經卷の眞理は心を以て心に傳へるので 所謂水を吞て冷暖自知するので 宇宙の妙理も實參實究して會得せねば解るものではない 即ち教外別傳であるから 論理上からこれを説明することは出來ない 強て出來

ないではないが 爲れば禪の眞意義でない文字言句以上 別に妙趣があると云ふのが不立文字の主張である………禪は以心傳心の宗旨であるから これを論理的に説明することは先聖の例にない ソコデ其宗旨を示すには いづれも經論以外に 趣味ある詩歌を以てして居る支那に於て禪の宗旨を尤も簡明に示されしものは 多く詩である 例せば僧璨禪師の 信心銘、石頭禪師の、參同契、洞山禪師の、寶鏡三昧、永嘉禪師の、證道歌、等は有名なものである 更に何人も知つて居る 碧巖錄は 雪竇禪師が禪門歷代高僧の逸話の中から宗旨の本色を擧揚し 後昆の摸範となるべき問答や 說話などを一百則集めて 一々それを詩に作りて門人に示されたのが初りて 其問答や說話を公案とも古則とも本則ともいふので其詩のことを頌といふ 即ち本則と頌とを集めて 雪竇頌古と云ふので 宋の始めの頃

から行はれて居たのを 同く宋の徽宗皇帝の頃に佛果圓悟禪師
 といふ 名僧があつて殊の外 雪竇頌古を喜びて 一則毎に小
 序を付して それを垂示と名けられた コレハ圓悟禪師が門人
 に示したからである サテ又其本則と頌との一句毎に短評を加
 へてこれを着語といひ 又本則にも頌にも詳しい總評を付して
 それを評唱といふ カクテ雪竇の集めた 本則と頌と 圓悟
 の垂示と着語と評唱と五ツ集りて一部の碧巖録と名けられたの
 である 碧巖といふ二字は圓悟禪師の居られた澧州夾山の靈泉
 院の居間の額に碧巖と書てあつたので 此室で撰述せられたか
 ら碧巖録と名けたのである 愚僧は曾て同院を訪ひ一周間滞在
 して其額を申受て今に保存して居る他日法幢を中央首府に懸し
 法戦を開く時は場中に懸けて諸人に觀せることもあるふ サテ
 此碧巖が禪門第一書と云われて頗る珍重するのであるが 矢張

り詩的である

猿抱兒歸青嶂後
 鳥啣花落碧巖前



獨	迂	偷	處	得	會	悠	何
弄	愚	生	世	意	心	々	願
耕	如	空	漫	文	詩	自	聲
雲	我	送	耽	章	賦	適	名
釣	真	有	無	不	時	脫	身
月	堪	爲	用	價	忘	塵	後
權	笑	年	學	錢	韻	緣	傳

曹山釋元恭漫草

達磨の人格

曹山釋元恭禪師侍者田中秀雄筆記

禪宗と申す宗旨は誠に妙な宗風で、唐宋の文學隆盛なころ勃興した故であるか知らんが、達磨大師最初傳法の時から韻語スナハチ詩を以て唱ひ始められた。尤も是れも禪宗に限らず支那以來に限らず、天竺でハヤ伽陀と云ふものが有て即ち支那の詩又は我國の歌のような者かて教義を述るのが普通の規則であつたと云ふこととて有るし、支那に翻譯されたときも或は五言或は四言で偈頌と云ふものが有るなれども韻字を踏んで詩のかたちに作つたのは梁のころに傅大士の心王銘などが古ひところで其れに次で、達磨大師の傳法の偈で有らふ其偈は五言絶句で八庚の韻が踏んである即ち吾本來此土、傳法救迷情、一華開五葉、結果自然成、と云ふのである。此一首の詩

に就ても達磨大師が不立文字と言はれたのが如何なる意味であらうぞと云ふ疑ひが起らねば成らぬ。無學文盲な禪宗の和尙等が不立文字と云ふことを不用文字と云ふことのやうに思ふて居るのは天地の違ひである。達磨大師が嵩山少林寺で九年面壁して居られたと云ふのを永い月日をボンヤリ面壁して何もせず居られたと思ふて居る大な考へが違て居る。熱血曠拳、教相執着の徒に鑑鎚を與え、本地の風光に達せしめんと指示せられたのである。看よ梁の武帝に逢はれた時には通譯人もなく應接せられしはタシカニ支那語にも通して居られた。直接に問答されたのであらうと思ふ。其後は支那の文學にも通せられて前條の韻語をも綴られたこととて有らふ。さて達磨大師に就ては多く誤傳があるから少しく達磨の人格を述て見よう。達磨は南天竺香至國の王子であることは誰れも承知して居るが抑

も印度の國名に就ては古來諸種の説を立て、印度、或は天竺、或は身毒、或は月氏、月支又は月邦、婆羅門國等の名ありて一定せず。印度、天竺、身毒は梵語にして支那文字に當てはめたる轉訛であらふ。月支、月邦と云ふは其義を譯したのである。西域記に據れば印度とは唐に譯して月といふ。蓋し月に多名あれども是れ其一稱なり。印度の地聖哲相踵きて起り凡俗を化導し衆生を濟度せしこと、猶月の天地に照臨したるが如し故に其國名を月に取れりと云ふ。一説には印度と因陀羅とは音相近きが故に印度の名稱は因陀羅なる神の名より由來せりといふ。因陀羅は譯して帝釋天といひ、印度では開運の守護神として處々に祭てをる。印度の名が果して此より由來せしやは一の疑問である。又其國を指して婆羅門と呼ぶは印度民族中婆羅門種は第一位の種族なるが故に國名として傳へしには非ざるか。國名

に就ては他日歴史上意見も述ることとして今は疑問の裡に存してをこふ。唯だ普通一般、印度又は天竺と使用せられて居る。歐羅人のホンツスタン若くはインジアと呼ぶは土人の原語に出でし者として印度なる名稱を最も廣く使用せられて居ります。達磨大師の傳は○景德傳燈錄、佛祖統記、禪家正脈、傳法正宗記、虎關濟北集、等に據れば南天竺、又は南印度國に生るとしてある佛祖通載と、五葉集とには天竺を總稱名として南印度國を其一部としてあるが、孰れに依るも印度の南部に降誕せられし事と思ふ。光明藏に依ると東印度の人佛心的傳二十七祖般若多羅尊者行化して南印度香至國に至る國王請して法を聞くとあるソモ香至國とは何くてあるか。余が實驗せる地理を述べて見よふ。西に流るゝウキンジャ河と、東に流るゝガンジス河との北西、喜馬拉耶、インダスに至る間は西天竺なるべく、今之を

ホンツスタンと呼ぶ。三角形をなせる大半島としてホンツスタン以南をば中天竺と云しが今之をデカンといふ。其三角半島の東海岸、カルナチツクガーツ、オリツサア西海岸ウエストガーツ、其内地なるマイソル東海岸の海上錫蘭島、此等を總稱して蓋し南天竺若くは南印度國とは云しならん。東印度といふはベンガルの地ガンジス河口三稜洲地方を指せし者であらふ。然らば南印度の香至國とは何れの地なりしや。東印度に連接せる地とせばベルガル灣頭のオリツサアなりしか。又更に南してマドラス、ボンデチエリー地方なりしが、尤も西海岸のゴアボンベイ一帯の地には非ざるべし。支那達磨の像に於ける服裝等に就て見るのに、熱帯に近き風土の人の様である。木欄色の衣に赤色の袈裟を着せし遺像は、熱帯地の人でないよふだ。然らば北緯十五度乃至二十度間の地の人であると思われ。ソコテ香至國

は今のオリッサ地方であるふ、其當時支那海に來りしを見れば必ずベンガル灣の海岸に近き國であると思れます。ササ達磨大師の種族は印度の姓中の刹帝利王族である、印度には古來より四種の階級を分ち子孫必ず其家を継ぎ業を承て決して他姓を侵すことは出來ぬのである

第一 婆羅門種

第二 刹帝利種

第三 吠奢種

第四 戌陀羅種

第一の婆羅門種は譯して淨業又は淨行といひ四姓中の第一位に在りて道を守り法を傳へ専ら教學を司る僧職○第二の刹帝利種は譯して土田立といひ國土を統治し 爭亂を鎮撫する職として即王族である○第三の吠奢種は譯して毘舍といひ商賣人を云ふ

○第四の戌陀羅種は譯して首陀と云ひ農業を營むのである即ち四姓は僧士商業とも云ふべき階級であるから日本の四民とは懸隔も甚しく同日の話ではない、如此四姓の起因に就ては古代の傳記として奇なる話がある 婆羅門は、梵天の口より生れ、刹帝利は、梵天の脇より生じ、毘舍は、梵天の臍より生れ、首陀は、梵天の脚より生るといふ 其貴賤懸隔の甚しき階級の生したるは上古アリアン人種の進入せし際、征服者と服従者とを生じ遂に人權の上にも差別を來したるものであらふ 達磨の姓は即ち刹帝利種族である其父君は香至國王にして其名も亦香至と稱し三王子があつて長子は月淨多羅、次子は功德多羅、三子は即ち菩提多羅亦は達磨多羅と號し達磨多羅は天性高勝て諸子と境界を異にし 眼に紺青の色あり爲めに後世の人呼て碧眼といふ 七歳にして四韋陀の典、五明集を知り、法を慕ふて後博く

三藏に通じたりとある。ソモ達磨は刹帝利種にして婆羅門種の僧職を以て志願とせられしは、願ふに印度は王族尊からず、寧ろ淨行即ち婆羅門種の最上位に在るを見ては、苟にも穎才ならば、固より此を屑しとせずして、彼を取らんとする希望は、怪むに足ぬ次第である。達磨が淨行の職を取り王族の上に立たんと志願を起せしは、而かも幼にして嶄然頭角を現はせし者として、寔にさもあるべきである。殊に階級の尤も甚しき印度に於てをやである。王若くは王公と雖も沙門の前には平身低頭するとせば、幼少の達磨と雖も大丈夫當に此最上位の人たらんと志を起すへきは當然である。たゞ夫れ大乘の根器にあらざれば、此志を貫徹して一代に潤歩することは六ヶ布、是れ達磨にして始めて脱然として、世表に超越し千古を曠うして其最上位たる寶座に坐斷して、遙に佛心印を受け之を後世に傳ふるを得

たのである。達磨が震旦の初祖として支那に仰がれ日本に敬せられ不朽に一大宗匠として、其巨大なる足跡を乾坤無極の處に止めしは、固より其國の風習殊更に淨業を最上位として尊敬せしに出しとするも、亦天稟凡人に卓絶し、靈骨早く塵外に聳ゆるの大器量があつたからである。サテ達磨の師とせし傳二十七祖般若多羅は婆羅門種の姓にして東印度の人である。東印度は今のベンガル即ちガンジス河三稜洲地方を指すのである。般若多羅は婆羅門種であるから、諸方の國王に迎ひられ尊敬を受けるは當然である。……香至國王の迎請に應じ尊重せらるゝのみならず無價の寶珠を供養せられ、國王其の三王子をして出て禮拜せしめた。般若多羅は三子の智慧を試ん爲めに國王の供養せる無價の寶珠を指し三王子をして之れが辯明を求めた。長子月多羅云く此珠は最上にして七寶の中の尊なり固に世には之れに勝

る者なし吾王家に非ずんば孰れか能く之を致さん尊者の道力に非ずんば誰れか能く之を承けんやと説く次子功德多羅も亦此言の如く答ふ獨り三子達磨は曰く此珠は世寶なり未だ上とするに足らず諸寶の中に法寶を最尊となす是れは之れ世光未だ上とするに足らず諸光の中に於て智光を最上となす此れは是世明未だ上とするに足らず諸明の中に於て心明を最上となす此珠の光明自から照す能はず智光を借りて此光を辨するを要す既に此を辨して此珠なりと知り其實なるを明にす然らば實は自ら寶たらず珠は自から珠たらず智珠を借りて世珠を辨し智寶を借りて法寶を明にするの要あり師其道あつて其實現し衆生道あれば心寶亦現ぜん心寶是最上何ぞ世寶と法寶とを問はんや寶のフイシヨンは實にあらずフイシヨンの實是れ最上とす達磨の此言果して傳記の如くならしめばその心理

に於て聊か造詣する所が在つたのである般若多羅其辨惠なるを驚嘆し復一の問を試みたり諸物の中に於て何物か無相なるかと問ふ答云く不起は無相なりと答へ何物か最も高きやと問ふへば人我最も高しと答へ何物か最も大なるやと問へば法性最も大なりと答たりと般若多羅心切かに是大器なり必ず己れが嗣法となさんと謂ひしも時未だ至らざるを以て黙せりとは(祖師傳にあり)達磨時に年七歳とある其後父香至病んで歿せり三子號慟すること甚し達磨獨り喪所に於て端然として默坐し終朝にして起たず二兄怪んで般若多羅に告く般若多羅曰く達磨多羅入定せり將に見る所あらんとす驚く勿れ自ら起つべしと達磨定より起きて二兄に謂て曰く我父何くに往くかを觀んと欲せしに他は觀る所なく但た一の日明にして天地を照らすを見たりと達磨父王の殯車畢るを待て果して二兄に告げ般若

若多羅に向て出家せんとを求めて曰く「我素と國位を顧みず法を以て物を利せんと欲す」然れども未だ其師を得ず 久しく待つ所ありき 今尊者に遇て出家の志を決せり 願くは悲智容許あれよと 般若多羅其道縁純熟して勢沮むべからざるを知り 遂に其師に當りて禮を受け之か爲めに剃度して曰ふ「汝先づ定に入れり 蓋し日光三昧に在りし耳 汝諸法に於て已に通量を得たり 達磨は通大の義なり宜しく達磨と名くべし」と因て菩提多羅の幼名を改めて菩提達磨と號せり 是に於て達磨は竟に般若多羅尊者を師として出家せり 達磨既に出家して般若多羅に師事せり 此時達磨は年齢幾才なるやは傳記に在りけれども願ふに七歳にして始めて般若多羅に遇ひ 其後父王の殂去に至るまで約十年とすれば十七歳前後であるる 父王卒去の日入定功夫を凝らせし如きを見れば器根の成熟せし年齢なるべし ○祖師傳に依

れば達磨は般若多羅に師事して 其鉗鎚を受け其鍛練を経て既に四十餘載の星霜を経たりき 大乘の聖果はこゝに圓熟し 四十餘年の勇猛精進刻苦劇勵實參實究して終に大自在を得たりとある 即ち大器晩成とはこの謂であるふ 是に於て般若多羅乃ち法を以て付屬して曰ふ「如來の正法眼藏展轉して今汝に付す汝善く之を傳へて斷絶せしむることなかれ」と 達磨般若多羅に問ふて曰く「我既に法を得たり當さに何の國に往て佛事をなすべきや願くは開示を垂れよと 般若多羅曰ふ「汝法を得と雖ども未だ遠く遊ぶべからず 且らく○南天に止て我滅后六十七歳を待て當に震旦に往て大法薬を設けて直ちに上根を接すべし 嗔て速に行て日下に衰ふること勿れ」と達磨即ち命を稟けて南天に化導し然る後師命に違ひて支那に赴かんと決意せり ○支那の情勢 當時印度の沙門は殊にヒンヅスタンのパンジ

ヤツナ地方より多く路をヒンツクツシユに取りて支那に布教し支那の沙門亦數年を隔て、陸續印度に經律を求めたりしが故に支那の情勢は印度沙門の概聞せし所たりしなりパンジャツナ地方はカンジス河の上流に在りベンガル即ち東天竺と相通ずべし般若多羅が能く支那の情勢を知りて數十年の後以て支那に布教すべきを達磨に誨へしは亦固より怪しむに足らず況や商船時に緬甸暹羅の海岸を迂回して安南地方に通商し支那の南方に貿易するものあるに於てをやベンガル地方に位する者の支那の情勢を耳にする如きは怪むに足らず達磨が梁の武帝普通元年若くは普通八年即ち大通元年に支那に入りし者として其以前航海に三年を費やし更に六十七年南天竺に止りて化導せし者とせば普通元年より七十年以前は正に宋の文帝の元嘉二十七年魏の大武二十七年西曆四百五十年に當り大武か出家沙門を坑殺し佛寺

を毀ちし四年後なり又大通元年より七十年以前とせば宋の光武帝の大明元年魏の文成が宗愛を誅せし五年の後の年西曆四百五十七年南朝の宋北朝の魏共に内訌に擾亂するの時に當れり元嘉二十七年若くは大明元年是れ達磨が般若多羅に往て傳道すべき國を問ひし年なりとすべし禹域四百餘州方さに擾亂の情勢あり

○達磨航海 雪竇頌曰展翹鵬程六合雲 搏風鼓蕩四溟水 印度洋の潮はベンガル灣の大海門に満ちて翠碧諸嶼は半空に浮びマラツカ海峽の群島皆浮動してスマトラ、ボルネオの六々鰲頭浪を吹き雲を吐き日月之に出没して星辰此に動搖し太平洋多島海こゝに新なる乾坤を開いて赤道直下より來れる東北時候の風万里南來の潮流箭の如く藩禹の海門に衝入するところ垂天の鵬翼を張り怒濤に駕して飛來せる是れ何の一帆ぞ……南印度の大偉人達磨は既に六十七年間本國の接化を終へ今や將に東

洋に航せんとす。往いて先師般若多羅の鑑塔を辭し尋て六宗衆徒の惜別するに對し坐寶蓮華これを慰安し。更に王宮に趣き異見王に告別して曰く(我震旦に其機熟せり今東に去らん當さに善く汝の躬を持って爾の國家を保つべし)と王涕泣して曰く(余が天何を祐せずして我尊叔をして之れを去らしむる此の國何の罪ありて彼土何の祥かある吁既に縁あれば是れ止むる所に非らず唯願はく早く回られよ)と是れに於て王は達磨の爲めに大船を備へ載するに衆寶を以てせり達磨は此に駕して一帆震旦を指して去らんとす國王躬から親戚臣僚を帥めて達磨を海濱に送る國人之を觀て皆涙下る南印度の船東大洋を指す錦帆海風に飄て蒼々渺々海洋の地平線外に去り海門たゞ金光天地間に照耀するを見るのみ、南印度の一帆天表に昇りしか將た地外に出てしか去て何れに往きたるか帆は見えぬ浪は青し雲は飛び風は吹き一帆何れの

邊ぞ

達磨の航海に關する群書に就て見れば○景德傳燈錄卷の三には師重溟に汎て凡そ三周の寒暑にして南海に達す○五燈會元卷の一にも同一の記載あり○禪宗正脈卷の一も亦同記事を載す○唐史には達磨衣鉢を將て海に航して來るとあり○濟北集卷十八には通塞志の言を載して達磨海に汎んて至る○佛祖統記卷三十八には達磨海に航して廣州に至ると記せり達磨の航海に就ては群書皆一致せざるはなし獨り達磨が航海せし船及び日數に就ては群書多少の異同なしとせず

達磨の船に就ては○佛祖統記二十九に商舟に寄載して南海に達すと○佛祖通載卷の十二商と同じく舟に馭して南海に達せりと○祖師傳には王爲めに大舟を具し實つるに衆寶を以てせりと記せり達磨が航海せしところの舟は商船なりしか將た王の大舟を

りしか其行くや商と同じく舟に馭したりしか願ふに國王の叔千
 萬里の海外に航す國王が爲に大船を具せしといふは事實である
 ふとソ一して其舟は支那人の所謂泉舶の大なる者であるふ然
 れども航海は航路を知るの水導を要するので獨り遠く東洋と通
 商せし商賈の外また万里の海路を知るものはあるなし
 達磨が王の具へし大船に乗り水先案内として海路を知れる商賈
 を倍乗せしめ幾多の従者門弟をひきいて載するに來實を以てし
 行く行く商賈をしてその通ずるところの國々に貿易せしめ諸島
 諸國の海岸に沿ひて航行せしとせば諸書に記する多少の異同あ
 るも蓋し之を綜合して始めて實事なることを知らん
 航海の日數に就ては○景德傳燈錄は凡そ三周の寒暑にして南海
 に達せりと○傳法正宗記には凡そ三載にして初めて番禺に至る
 といひ○禪宗正脈に三周寒暑といひ獨り傳法正宗卷の五に達磨

傳評契嵩補注に「東來するに路にあること二年といふ異あるのみ
 達磨は二年にして番禺に達せしか將た三年を費やせしか南印度
 出帆の月日を審にせざれば固よりその航海に費せし日數を結算
 して誤謬を明にするを得ずと雖も其三年若しくは二年として傳
 へらるゝは願ふに其三年といふは三年間に亘りしといふ意義と
 見るもよろしかるべし其二年といふは三年未滿といふ意義に解
 釋せば至當ならん何となれば達磨の到着は第三年の九月二十壹
 日に當ればなり然れば達磨の航海三年を費やせしといふ先づ
 當れりとすべし

三年の長日月萬里風濤の險を冒かし幾野蠻國を経て或は無風帶
 に苦み龍遊ふところ鰐潜むところと傳られしを過ぎマラカ、ヂ
 アバ、ボルネオ、スマトラ、等の諸島諸嶼の間を梅風沐雨瀉瘴
 激潮千辛萬苦具さに苦酸を嘗めて遂に支那の南海に達せしなり

達磨が到着の地を南海、番禺、廣州今の廣東、香港地方なりしといふに於て諸書皆一致して居る
 赤道直下の多島海を吹き荒む時候風と大海潮とに乗じて天より降れる神の如く海に飛べる甕の如く万里の怒濤を破つて得々として進入し來りしは支那の何づれの代なりしか達磨が到着の年月に就ても諸書多少の異同あれど要するに梁の武帝普通元年なりしといふものと普通八年即ち大通元年なりしといふものとの二説あるに過ぎず普通元年説を取る者には傳法正宗記の普通元年庚子九月二十一日といふ者○五燈會元○禪宗正脈あり○正宗記には普通八年丁未の歲なりと云ふ○傳燈諸家の舊説に普通八年達磨梁に來ること存るも史書を按ずるに普通は祇だ七年に至るのみ○寶林傳に普通八年丁未に在り即ち其年魏に過ぎる明帝大和十年に當るといふを駁して太和は魏の明帝の年號に

非らず更に○寶林傳の達磨の滅度は明帝の太和十九年に在りといふを駁して明帝在位は祇だ十二歳なれば十九年なし丁未を以て推考するに未の年明帝已に崩御せり若し果して普通八年丁未十二月を以て魏に過ぎれりとせば達磨魏に在ると九年にして其歳數に登らず若し普通元年庚子を以て推せば即ち其事稍等しからんといひ即ち今普通元年庚子を取て準となすと結論せり○五燈會元○禪宗正脈共に普通七年庚子九月二十一日といひ達磨の其年十月一日金陵に至り遂に洛陽に至りしを載して魏の孝明帝正光元年に當ると曰ふ是れ明白なる誤謬にて正光元年は庚子なり庚子ならば普通元年ならざるべからず普通七年は丙午にして庚子に非らず其普通七年といふは明かに普通元年の誤にして○正宗記に遵して普通元年説を採るを至當とす然るに大通元年説を採る者には○佛祖統記、法運通塞誌、佛祖通載、濟北集

等にして法運通塞志は更に進んで大通元年は即ち北魏孝明帝武
 恭元年なりとて普通元年説も同八年説も共に駁してある。要す
 るに達磨の廣州府に到着せし日をば梁の大通元年魏の武恭元年
 丁未神武紀元千九百九十七年繼體天皇の二十一年西曆紀元五百二
 十七年ビザンチン帝國皇帝ジヌスチニアンの即位元年に當れる
 九月二十一日なりしとせざるべからず
 大通元年丁未九月二十一日達磨廣州府に來れり廣州の刺史蕭昂
 迎へて之を歡待し表を草して梁朝に奏聞す武帝表を覽て使を遣
 し詔を齎し拜請し京師に至らしめり達磨乃ち十一月一日を以て
 建業に至り留ること十九日 當時達磨を迎ひし廣州の刺史に就
 て異説ありと雖もソハ他日述るとして今は達磨が建業に赴きし
 日に就て考ふるに○傳法正宗記が獨り十一月一日と載するの外
 他の群籍は皆十月一日なりしとせり而して佛祖通載論は十月一

日なりといふの説を駁して傳燈錄には師九月三十一日を以て廣
 州に至り十月一日を以て金陵に至れりと云へども廣州より金陵
 に至るは三千餘里(我カ五百
 余里ナリ)命を以て往復して師方さに行を啓け
 りとせば豈十日間を以て能く三千里を歴んやと難じてある。是
 れは正當なる批難なり若十一月一日金陵に至るとせば九月二十
 一日より凡そ四十日餘或は以て順風海に浮び江を溯り三千里五
 百餘里を行くに足らん茲に達磨が十一月一日を以て金陵に至れ
 りとする者此説を採て準とす

達磨金陵に至る當時支那佛教の盛大なる殆んど前古未だ見ざる
 所なりしも當時の沙門は唯名數を以て解釋をなし事相を行とす
 るに止まり論律を説き梵文を譯するの外更に教義の神秘を傳ふ
 るものはあらずき達磨の南印度より來りしは蓋し此等沙門の
 頭上に向て投下せる一大鐵鎚である 達磨は不立文字と喝破し

て執着を打破し正宗を顯揚し心印を單傳して見性成佛せしむるを以て極致となせり。如此旗色を鮮明にせし達磨は方さに當時佛敎興隆の中心點なりし。南朝梁の首都建業に來り其城門に入る此時武帝は法駕出て之を迎ひ正殿に陪座せしめたり。武帝即ち問ふ、朕曾て寺を建て經を寫し大に僧尼を供養す必ず何の功德かあると達磨答て云、無功德と帝云く、何ぞ無功德なる、達磨對云く、此れ唯だ人天の小果有漏の因影、形に隨ふが如く有と雖も實に非らず。帝云如何是眞功德、達磨答云、淨智妙圓にして鉢自ら空寂如是功德世を以て求めず、帝復問云如何是聖諦第一義、達磨云く、廓然無聖。帝云朕に對する者は誰、達磨云、不識と帝悟らず。達磨乃ち金陵に留ること十有九日にして去れり。後帝舉て誌公に問ふ、誌公は當時高座寺の住持なり。誌公曰く、此れは是觀音大士佛心印を傳ふるなり。

と帝悔て使を遣し去て之れを請せんとせり。誌公云く、陛下使を遣はし取らんと謂ふこと勿れ。闔國人去とも他亦還らじと。達磨帝の爲めに法要を説けども帝はたゞ教乘の見識を持するのみにして、亦本地の風光を知らず。達磨通譯を借らずして武帝の問ひに應じ、相酬て老婆心切を盡くすと雖も帝猶契わす。達磨帝と其機縁未だ契はざるを知り、金陵を去る即ち梁の大通元年魏の武恭元年十一月十九日を以て潜かに梁の境を去れり楊子江を渡り四日にして二十三日を以て魏の境に趨き尋て洛陽に至れり。諸大夫儒典を持して往て詢問せり達磨は天竺の人なり支那に入てまだ半年ならず漢字固より其學ばざる所即ち曰く、吾字を知らず試みに見んと諸士魯論を以て示す達磨云く、是れ是非を説くの文字なりと春秋を示す。達磨云く、血腥しと周易を示すに及んで、達磨云く、此天書なり吾國之れなしと雖も能く一音一字

を以て之を亟にす。傳者達磨が鼻を以て鼻ぎ能く其書に通じ周易を天書なりと曰ひしと叙したり。是れ亦事を神異にしたるに過ぎず。達磨か殊に周易を天書なりと云ひしは恐らくは其卦形が中央亞細亞の古文楔形文字と形を同うし隨て梵文と稍形象に於て類似する所あり又其卦を一語として見一語を一字として考へ其綴字法の全く梵文の綴字法に似たるより能く一音一字を以て之を亟かにすべしと言ひしにはあらざるか。

達磨嵩山に登り少林寺に入る。五嶽の中岳を嵩山と云ふ三十六峰あり。東を大室といふ西を少室と云ふ去ること十七里嵩は其總名にして分を室と謂ふ其下に石室あるを以てなり少室高き八百六十丈上方十里大室と相均しく但だ小なるのみ嶽の西北の一峰を望都と號す天候晴良なれば即ち魏都洛陽を望み見ること隱々として車蓋の如し。東北の一峰を鷄鳴と號す五更の初に便ち

日の出を見るといふ玉女の白巾を擣つ石あり立秋前一日嶽下の人中夜に杵聲の響あるを聞く。吹笙山あり世に傳ふ王子晉の笙聲なりと少林寺は其南に當り隱れて屏風を列るが如し中に達磨の像あり西北に行く三里(我十八町)許是れを面壁菴となす。菴に影石あり乃ち達磨面壁九年の遺跡である庵の前に三華樹と稱する一年に三たび華さき白色にして異香を放つといふ(文苑地理誌)名勝志河南省五に登封縣の下に(名山記)に嵩山は縣の東十里(我一里廿四丁)にあり又大明一統志二十九に(河南府の少林寺は登封縣の西少室山の北麓に在り後魏の時に建つ)とあり○唐の高僧傳第十九には(後魏の孝文帝の時天竺の人佛陀禪師帝の南遷して都を伊落に定むるに隨へり。敕あつて少室山に就て之れが爲めに寺を造る今の少林寺是れなり)と記せり。嵩山の少林寺か魏の孝文の時に建てられしといふは所據あるよふである。ソレテ其面壁

庵なるものは稽古畧第四に趙宗庚辰元符三年少林の道場を治し名けて面壁庵と曰ふとあるを見れば達磨以後の名稱なるを知るべし

詩經曰く嵩高維嶽峻極干天維岳降神生甫及申維岳少室山の北麓南面して八千六百尺の削壁に對し隠れて屏を列るが如き者は是れ少林寺である達磨此に靜隱坐して降らざること九年即ち世に傳ふ面壁といふは少室山八千六百尺の削壁に南面して四來の雲客を接化せられしを指すのである

時に沙門神光と號する者あり其人となり曠達にして世に混じ世亦以て不測の人となせり久しく伊洛に居して諸史百家と讀み盡し善く玄理を談せり毎に歎じて曰ふ孔老の教は禮術風規のみ莊易の書は未だ妙理を盡さず近頃聞く少林寺に達磨大師あり佛祖の的傳を得と玄妙を提唱すと神光少林の室に入る達

磨端坐面壁して顧り見ず神光思惟すらく我不愛身命但惜無上道とは佛陀の金言今我れ法を求め道を究めん宜しく其身を忘るべしと時に十二月九日夜天大に雪ふる神光直立して動かず天明に至ば積雪腹部を没す達磨憫んで問云く汝ち雪中に立つ當に何事を求めんとする神光曰く唯願くは和尚慈悲門を開て廣く衆生を度せよと達磨云く諸佛無上の妙道曠却に精勤して行じ難きを能行じ忍び難きを能忍ぶ豈に小徳小智輕心慢心を以て眞實乘を冀わんや徒らに勤苦に勞せん神光潛かに利刀を採て自から左臂を斷て達磨の面前に置く達磨是れ法器なりとして神光に謂て云く諸佛最初に道を求むるに法の爲めに形を忘れり汝今臂を吾前に斷てり求むるも亦可なり神光云諸佛の法印得て聞くべきや達磨云諸佛の法印人より得るに非ず神光云我心未だ寧からず乞ふ師爲めに安んぜよ達磨云心を將ち來れ汝

と共に安んぜん。神光良久して曰く心を究むるに不可得なり。達磨云我汝と共に安心し畢ぬ。神光恍然として開悟せり。達磨竟に慧可の名を與ふ。爾後僧俗靡然として達磨の所に趨き接得を承け。達磨道聲禹域四百餘州に聞ゆ。梁武帝書を魏に遣して曰ふ「共に觀音の分化に頼ると。達磨名聲是に至て魏の朝廷に聞ゆ。孝莊皇帝三たび詔して迎請すれども動かず。帝亦之を高しとして遂に就て二つの袈裟及び金銀器物を賜ひしも達磨皆遜りて受けず。三度返上す。帝遂に親しく行幸して法を開き之を捧げて授けたりとある。

法盛なれば魔隆なりて達磨の禪教滿禹に轟き此時に當て論律を演し梵文翻譯の講授を弘めつゝある光統律師流支三藏等は魏に於ける名聲家であつたが達磨の禪法を聞て嫉妬を生し種々譏謗を加へたれども獨り慧可ありて志を高遠にし道の歸趣あるを

知り親しく達磨に事へて亦天下の誹謗を顧みず五ヶ年一日の如く常住供給して少しも懈らず。達磨亦力を誘掖して慧可等の爲めに大乘入道四行を辯疏せり。四行の法語は蓋し編年通論、佛祖通載、佛祖統記に載す。尋て尙中下の機を憐んで眞性圓頌を製し安法門、血脈歸空、破相悟性の諸論を著せり。眞性圓頌は靈心隱の可光の述る所にして人天眼目并に諸祖偈頌集に出て安心法門は唐の大珠の頓悟論、永明の宗鏡錄、大惠の正法眼藏、明晦翁の聯燈錄に載てある。血脈歸空悟性等亦冊となし世に行わてをる當時達磨の言録として少室六門集あり。此等諸法語が果して達磨の所説に係るや否やは容易に斷言は出來ぬが古來より稱して達磨の所述と傳へたれば姑く此に載て措くのである。畢竟達磨の法門は學者の凡て教相に執着するを勘破し更に直指人心見性成佛を指して頓に無生を了ずるを明にせんとせり。達磨が直

達正觀の主張は當時梁魏兩朝の沙門に向て一大鐵鎚を下したる
 のであつた。是に於てか論律教者法師等周章狼狽遂に瞋恚怒罵
 せりといふ。達磨は自若として動かず徐ろに玄風を振ひ普く法
 雨を施さんとの老婆心は。彼等の編挾なる嫉妬猜忌競ふて害心
 を起し其徒數々毒藥を加へて達磨を殺さんとし或は人をして達
 磨を撲たしぬ其前齒を打折し亂暴狼藉をなしたるも達磨は動靜
 一如にして生死去來凡て湛然として空寂であるたとへ鋒刃に遇
 ふも鋒刃何の怖るゝ所ぞたとへ鳩毒に中るも鳩毒何の苦とする
 所ぞ。達磨は凡その罵詈譏凌辱兇行危害に逢て坦然として毫
 も怒らず恐れず從容として其鳩毒を受け其毆打に甘んじ晏然と
 して彼等に對せり。鳩毒は達磨を殺す能はず。毆打は達磨を屈
 する能はざりき。達磨一日慧可に示して云「汝但た外諸緣を息め
 て内心喘くことなく心牆壁の如くにして以て道に入る可し慧可

種々に心と説き性と説くも俱に契はず一日忽然として達磨が示
 す所の要門を省得し遽に達磨に白して曰ふ「弟子此回始めて諸緣
 を息む。達磨已に悟れるを知て更に窮詰せず只曰ふ「斷滅と成り
 去ること莫きや否や」慧可曰ふ「無し」達磨云「汝作麼生」慧可曰
 ふ「了々として常に知る故に言の及ふ可らざるなり」達磨曰「此れ
 乃ち從上諸佛諸祖所傳の心髓なり汝今既に得たり更に疑ふこと
 勿れ」と

達磨魏に在ること久し一旦遽に其門徒に謂て曰ふ「吾西に返らん
 時至れり汝等宜しく各所詣を言ふべし」と時に道副あり先進んで
 曰「我所見の如くんば文字に執せず文字を離れず而も道用をなす
 達磨云「汝吾が皮を得たり」尼總持あり曰「我今所解は慶喜の阿闍
 佛國を見るが如く一見して更に再せじ」達磨云「汝は吾肉を得た
 り」道育あり曰「四大本空五蘊有に非ず我是處は一法の得べきな

く言語同斷して心行處滅すと 達磨云「汝吾が骨を得たり慧可に及んては前に進んで拜し已て本位に歸て立てり達磨云「汝吾髓を得たり」 達磨尋で慧可に命して曰昔如來大法眼を以て摩訶迦葉に付囑し展轉して我れに至れり我今以て汝に付す汝宜しく之を傳ふべし其れをして絶へしむるなかれ並に汝に僧伽梨及び寶鉢を授けて以て法信となす唯恐らくは後世汝が我に於ける異域の人なりといふを以て其師承を信せざらんことを汝宜しく此を保持して信となし其宗旨を定むべし

既にして達磨其徒と即ち禹門の千聖寺に往き居ること幾もなくして太守揚衡之といふ者に會へり衡之素より佛事を喜び達磨の至るを聞き乃ち來て之れを禮し因て曰ふ西土五天竺師承して祖となる其道如何 達磨曰く「佛の心宗を明にして寸毛差なく行解相應するをば之を名けて祖と曰ふ衡之又問て曰祇た此れ一義別

に有りとやせん 達磨曰「須く他の心を明かにし其古今を知て有氣を厭はず亦取るに非ざるが故に不賢不愚無迷無悟若し能く解するを亦名けて祖となす」 衡之復問ふ弟子業世俗に在て知識に遇ふこと罕なり小智蔽はれて道を見る能はず願くは師之を教へよ何れの道にか違はしめん果して何の心を以てか佛祖に近づくを得ん 達磨之れか爲めに偈を説て曰「惡を觀て嫌を生ぜず亦善を觀て勤措せず亦愚を捨て、賢に近かず亦迷を抛て悟に就かず大道に達して過量たり佛心を通じて出度し凡聖と纏を同ふせず超然たるを名けて祖と曰ふ」 時に衡之教を得て欣然として之を禮拜せり

達磨魏にあつて無門の法門を開示すること九年靈山一枝的傳の如來正法眼藏は達磨より慧可神光に付傳し畢はり亦志を支那に有せず正に西天に還らんとせり

而して達磨を忌み之を害せんとせし律論者輩は達磨を殺さずんば已まざらんとす後魏の光統律師流支三藏等の妬僧は數々鳩毒を達磨に加へしも皆其効を奏せず是に於て彼等は益々苦肉の惡策を設け都合第七回の毒藥を加へたり達磨は化縁已に畢はり傳法其人を得たりしを以て遂に又自ら救はず門徒に遺言して端然として座化せり時に乙卯の歲梁の大同元年西魏文帝の大統元年皇紀一千百九十五年安閑天皇即位二年西歷紀元五百三十五年壽一百五十歲十月五日熊耳山の吳坂に葬り無縫塔を建つ魏主は中使阿弘簡を遣はし書を馳せ哀を梁の武帝に告ぐ武帝感惜する之を久して詔を昭明皇太子に下し頌文を備へ宗子諸王百官と偕に就て奠り寶器十六事を賜ふて祭祠と絹百束を賻助の禮とせり昭明太子誅文の畧に云く洪惟れば聖胄大師十方の智印を荷て六通に乗し海に泛んで悲智を梵方に運らし顛危を華土に拯へ

りと後又武帝親から碑文を撰す其畧曰玉繼久く灰し金言未た割れざるか爲に誓て心印を傳ひ人を天竺に化せり錫を杖にして梁に來て無説の法を説くに及んで暗室の炬を揚るか如く明月の雲を開く如く聲は華夏に震ひて道は古今に邁きたり嗟呼之を見れとも見へず之に逢へにも逢はず今にして之を亢にし之を悔ひ之を恨むと其讚云く心有なれば曠劫にも凡夫に滞り心無なれば刹那にして妙覺に登る朕一介の凡夫と雖も敢て之を後に師とすと皇帝遂に碑を鐘山の定林寺に建てり

寶鏡三昧講述

曹山釋元恭禪師講述

侍者小柳仁道筆記

洞山語本大師の作として傳へられたる寶鏡三昧は四言の古詩である。本詩に就ては古來より解釋せられた著書も世間に澤山あるが、今回愚僧が講演したとて別に異なることはない。縱ひ其意味が十分に辯明せられて自由自在に講演か出來たとして見た所か此れか眞實自分の物に成て實行出來ねば何の所詮も無ひ。此れを實行しやうと云ふには、自己に向て反照せねばならぬ。其境界を得んには申迄もない。實參實究か第一肝要である。愚僧も三十年來實行せんと勤めたるもの、未だ寶鏡三昧を全提して我かものとして、自由に扱ふことは出來ぬ。全提することは出

來んけれども 多年の心懸けて 歸家穩坐聊か洞山大師と相見
 した心持かする 可惜許 賊後の弓
 サテ四言九十四句即ち三百七十六字の古詩でありますが 禪理
 を深切に顯はしたものは之れに過たものは無しとは古來よりの
 定評である 臨濟 曹洞 黃檗と現今稱しつゝ何れの室でも
 悟道の深意は此實鏡三昧で仕上げのカンナとして珍重するので
 ある 曾て五百年來間出の禪として 其名も高き正宗國師白隱
 禪師は實鏡三昧と五位の調べは嚴しかつた申すことは 愚僧か
 潭海禪師の鑑鏡を受け時に數々垂示されました 此の實鏡三昧
 の作者にして異説もあるから一寸御注意を申てをく 藥山惟儼
 禪師の作とも云ふ説もあり 又其法嗣雲巖曇成禪師の作である
 と云ふ人もある しかし曹洞一派では洞山良价禪師の作として
 廣く信せられて居るサテ洞山禪師の人格に就ては既に諸書に紹

介せられて居るから 愚僧が贅辯を費す必要もないと思ふ法系
 としては 達磨大師から洞山禪師まで十一代に成る 釋尊から
 は三十八世にあたる 洞山禪師の綿々密々と云ふ特色を言葉に
 顯したのか即ち此の實鏡三昧と五位と申すのがあります サテ
 此の實鏡三昧は前に申た通り臨濟でも曹洞は勿論黃檗でも盛ん
 に行はれてあるのだから 其解釋に就て見れば 永覺禪師の洞
 上古轍 天桂禪師の報恩篇 面山禪師の吹唱 指月禪師の不能
 語 千丈禪師の杓卜篇等のものには皆是の實鏡三昧を提唱して
 あります 又白隱禪師の會下に東嶺禪師か五家參詳要路門と云
 ふを著して其中にも實鏡三昧を評論してあります 愚僧も各先
 輩の意見を斟酌して講述する積であるから 豫め御含まで申て
 をきます

實鏡三昧 實鏡と云ふは譬である 三昧は法である 凡そ譬へ

と云ふものは全分には當てはまらぬものだ。大抵その中の幾分かを譬に取るものである。佛經では華嚴經の普賢行願品に心は淨明鏡の如く物を鑑みて未だ嘗て私せずとあり。祖錄では寶鏡錄にも鏡の譬が有て皆吾々を互ひの心の本性を鏡に譬へたので佛經にも祖錄にも鏡の譬は幾らもあるか。別けて洞山禪師は大寶鏡と名けられた。寶は最尊最重の義と申して此の上もなく尊ひものと云ふこと。看よ吾人本心ほど尊ひものは又外にあるべきではない。僅に五十年や七十年の命てさへ命に替る寶はないと云ふて居る。此心の本性は不生不滅不増不減の命である。此より以上の尊いものは有るものでない。鏡と云ふは其淨く明らかて一點の私しも無いところに譬たのである。實に吾人本具の圓明なる心の本性は胡漢相現し照鑑差ふこと無しと申して彼の一點の曇りも無い鏡は花が來れば花が映り紅葉が來れば紅葉が

映り楊姬小町の如き美人が來ても喜ぶても無ければ盜跖五右衛門の如き兇賊か目を瞞らして來ても怖れもせず。如何なる物に出合ても憎愛も無ければ取捨も無いから。法爾法性歷々分明と照して一點も私がない。如何ほど大きな物でも相對すれば寸毫も漏さず映し如何ほど小さい物でも毛髮ばかりも遺しはせぬ。其歷々と映る万象は内から出たものでもなければ外から來たものでもないから其物が去るに任せて露ばかりも痕も残さず吾人の心も此通りにさへ往たなら何も申すとはない吾人か眼があるに依て花も紅葉も見へるコレハ釋迦も孔子も達磨も韓圖も犬も猫も同じことである。釋尊が御覽なされても花は花に違ひない吾人が見ても紅葉は紅葉に違ひない。コレハ至れば釋尊も吾人も彼の鏡も同様で少しも變りは無いのであるが。然るに吾人が見ると直に彼花よりも此花が好いイヤ此花は嫌た彼花をれば僕

の希望する處だナゾト各々 其注文が始まる 注文は平等觀中の差別であるから強かち惡ひとは云わぬがソコダソコを鏡の如く萬象其まゝに照して敢て痕を留めない様に成たらソレソコが大寶鏡に同化した境界じや ヨウ云ふと人間として出來ぬと思ふ人があるけれども 普通人間で出來ないからこそ人間以上即ち向上の一路に登りて佛になる祖になると云ふのであるソレハドーシテ成ると云ふに即ち其法が所謂三昧と云のです 三昧と云ふことは梵語ではサマパターともサマジとも云ふ漢語に譯すれば等持又は正受とも正定とも云ふのである 等持と云ふとは大般若の音釋に沈掉を離るゝを等と云ひ心をして一境に住せしむるを持と云ふとある 沈掉を離るゝと云いふとは心が昏沈と申して活機を失なつて死だやうに成るのを沈と云掉擧と申して心が妄動するのを掉と云ふのである 其の沈と掉との二つ

を離れて心靜かに成て居るけれども活機は十分に在ると云ふのが即ち沈掉を離れた境界である 即ち心の落着くこととて之れを禪定と云ふのじや 併し世間は邪定とも云ふことかあつて間違て居る落着き方がある譬へば大膽な人だと云ふうちに惡ひ大膽もあれば ヨノヘンは能く注意せねばならぬ サテ三昧と云ふは如何なることとであるかと云ふに 諸宗に傳ふる所の三昧に色々あるが達磨門下に正傳し來つた三昧と云ふは所謂坐禪三昧と申すである

大智度論の中にも坐禪のことを諸三昧中の王三昧と申すのであると言われている 何に事をするにも三昧に成らなくては成就は出來ぬソコ今は大寶鏡三昧になりきれと垂示せられたのである

サテ是から本文になります 本文は韻文で上聲の六語の韻と去

聲の七遇の韻とを使ふてある

如是之法 佛祖密附 法今得之 宜能保護

如是の法と云のが即ち寶鏡に譬へられてある三昧のこととて各自の心性を指したのじや 如是とは讀ん字の如くだ即ちコノトリーと云ふとて御經の書き出しに如是我聞とある六成就中の信成就である信とは疑を決し寸毫曇りのないところである彼の寶鏡に萬象の映る如く少しも私のない境界じやサーソーナレバ我此土安穩天人常充滿である 然るに世の中の人々は中々如是の法のトリーに成れないじや凡て輕心慢心を一轉して生れたまゝに立返れば實にコノトリーと天眞獨朗の當體であるか 兎角色眼を掛けてコノトリーと思ふ連中が多い 金剛經に若以色見我是人行邪道と御説きなされてある 能く氣を付て一隻眼より見渡さねばならぬ 大乘妙典に十如是と云ふ

とが説てある 即ち如是相 如是性 如是體 如是力 如是作 如是因 如是緣 如是果 如是報 如是本末究竟等と云ふのである 其を一々解釋すれば教蔬の所談となつて 中々面倒である 尤も佛典を引用し説明せんには 說相講經の次第順序を立てねばならぬ 法相 教蔬 觀心と云ふ工合からワリ出すとむづかしくなるから 今は觀心談として可成單純なことにしてをく 文字の義から申さば 如は不變の義である 是も亦不動の義とある 實に吾人の本心は不變不動に相違ないソコデ寶鏡に譬へてあるかイッノ間にやら塵りが積るやうなわけて 無垢清淨の本能を汚されて 私慾我見に陷て居る 要するに奪人不奪境で 主觀が客觀に奪はれて なに事も他動的となるからである 奪境不奪人といふ工夫が熟すると 隨處爲主立處皆眞なりだ サークーなると明暗已に絶

ちて明煌々じや 之れは前段に達磨が日光三昧を得て言われ
 た如く 我父何くに往くかを觀んと欲せしに他は觀る所なく
 但だ一の日明にして天地を照すを見たりといふ即ちコノト
 リてたる 此れは誰れから授けるものでも無い寶鏡の本能は
 寶鏡か具へて居る如是の法の印可は如是の法で無ければ得る
 ことは出来ぬソコデ 佛祖密に附すと申された 即ち西天の
 四七唐土の二三より歴代の高祖が一器の水を一器に移す如く
 智識相承として傳へられたのである 密と云ふても秘密とか
 隱密とか云ふ意味ではない所謂親密といふ密の字である 兩
 鏡相對すれば中に影も形もないココニ一點の曇りの無い鏡が
 ある 然るにモ一ツ其れと同じく曇りの無い鏡があつて
 其鏡と鏡とか兩方から向かひ合ふたときはドーダ確かにコチ
 ラの鏡の光か映りてをるアチラにも確かにコナラの鏡の光り

か映つてあるに相違ないけれども鏡と鏡と映りあふたのは光
 と光と融合しただけのことと少しも影も形もない少しも影
 も形ちも無いと云ふても物か映つていないので無いダシカに
 兩方の鏡か映つて居る 佛祖密に付するとは丁度このやうな
 わけてある 法華經には之れを唯佛與佛乃能究盡とも説てあ
 るのです 「汝今之を得たり宜く能く保護すべし」と洞山大師か
 汝とおさしなされたのは其門下の雲居禪師や曹山禪師等を指
 されたのであるが 雲居曹山兩師にはかり特許されたのでは
 ない凡そ如是の法を得るものは皆なこの汝と呼ばれたるんて
 あらうサ一諸士は汝と呼ばれた仲間入りか出来るかドーだ如是
 の法を得ることか出来さへすれは何時でも汝の仲間じやサ一
 洞山何れの處にかある雲居何人を曹山今こゝにあり 如是法
 サ一ユノト一リ 機ある底の漢は親しく看取せよだ ヨウ云

ふて見ると初心のものは、如是の法とか寶鏡とか云ふものを、寶物の譲り渡してもするやうに、授けるとか受るとか云ふこととか有て其れを如是の法を得たとでも云ふやうに思われては大變を間違になるよ、返すくも申した通り如是の法と云ふのも寶鏡と云ふのも人々本來具足底の妙心所謂る各自の本心のことじや、佛にもせよ祖にもせよ他人から授け得らるものて有らうか、自己本具のものを他人から得ると云ふ道理はなにに極つて居る、果して然ば洞山大師が汝今之を得たりと仰せられたのは、ド、ドしたと云ふことて有らうぞ、サー、ソ、コが人々の工夫のじどころじや、眞實自分で得た時て無ければナルホドと合點するわけには往くまい、已に之を得た上は宜しく保護すべしとある、此の保護と云ふことが、尤も此の寶鏡三昧の眼目とする所で、幾ら一旦得たからとて後の保護がタレカ

に出來無くては、如是の法を得た甲斐がない、保護と云ふは永久失はぬやうにすることである、然る心得違ひの人は悟と云ふことを、學校科目の卒業か又は懸賞に當選でもしたやうなことに思ふて一旦少しくばかりの機發でもあると、モ、早佛祖の眞髓でも得たやう考て、雲居の羅漢をきめて居るが、それかほんの一時のことて、程なく忘れたやうになり、禪學とか參禪とか云ふ話でも出た時に、ヤ、ツト思ひ出し、私も昔しは某僧堂に掛錫して何禪師何老師の下に險峻なる提撕を受け、て有らゆる占則公案を透過もし、機關、法身五位の調べもやが、あした何因縁か今は、俗界に妻子も出來て、生活の爲めに、は誠に耻し日送りをして居るといふ風の人々も澤山ある、是れか元來、佛祖の骨髓を得てをらぬから、其法を保護することか出來ん、畢竟志願が弱いのだ眞實見性した人なら自から

保護の出来るはずだ。忘れたいとて忘れられるものではない。譬へば火は熱い。ものを焼くと知れたからは、幾程頼まれても火を手で攫むことは出来ぬのじや。生死岸頭に自由の用を得たいと云ふ志願より一たび佛祖の大道に歸入し、公案灘頭直個の見處あらは、縦ひ俗にあつて如何なる業務に就くとも、自ら保護する所さへ有たなら、大火焔裡にも安心を所が無けらねばならん。ソコテ自由を得られんては、幾等坐禪しても、何程公案が通れても、それは何の甲斐も無い。宜しく保護すべして、此の一段はドーゾ空過せぬよう、大法の爲めに婆心を吐露したのだ。

銀盤盛雪 明月藏鷲

此の二白は譬を擧げて一切諸法の自在無碍なるありさま即ち如是の法が一點も曇りなく、寶鏡に歷々と映るさまを示され

たのである。凡そ世の中に有りとは有らゆる物事は皆二つツ、向ひ合ふて居るもので大小長短厚深薄淺是非曲直善惡邪正と云ふ工合だ。ソコテ釋尊も楞嚴會上で阿難にお示しなされた通り元來二種の根本と云ふが有て一つは無始生死の根本、又一つは本明元淨の眞躰これも無始て彼れも無始いつれもイッカラと云ふ始りもなく隠顯出沒して一方は迷の種となり一方は悟りの種といふのである。看よ世の中に有りとは有らゆる事は皆な此の二つの性質を受けて居る。迷も悟も先天的に具へて居るソコハ草木禽獸も人間天上も皆同じこととて有るから草木を見ても榮枯盛衰の姿をあらはして居る即ち一利あれば一害ありだ。然るに草木には憎愛といふ情識がないソレダカラ天然自然に程よく調和して我見も人見も無いから迷とも悟とも名のつける所が無いけれども人間に至つてはソウは往か

ん初め生れたばかりの赤ンチヤンのときにはギア〜と啼く啼くま〜にこ〜と笑へ笑ふま〜に法身如來か御說法と少しも違はず 恰も草木の開花落葉と何の異りもないよりであつたがイツの間にか天真の本徳が隠れて反對の片方に片寄る癖が付く就中悪い方へばかり片寄り勝ちて善い方は頼と頼れて來ぬから本來具へてあるといふものゝ絶へて無いのと少しも違はないありさまじやソコデ世の中の調和を失ふと裁判所が繁昌すれば警察事故が多忙となる 君臣父子夫婦兄弟姉妹と秩序正しき名は附つてあるがソレハ名ばかりのことに成て腹の中では己れと云ふ我慢我見ばかりより外に何にもない利害の爲めには父子法廷に争ひ情慾の爲めには夫婦共に亂れイヤハヤ淺間布ことではないかソレガ氣の毒さに 佛祖辛苦艱難御修行遊されて惡を止め善に移らせるやうに人天教より

初めて漸次善道の一方に導き菩提又は涅槃又は往生又は大悟とかいふ名を附けて佛と同化せしめやうと世話をやかれたのだ 併し菩提とか涅槃とか往生とか大悟とかいふ片方へ片寄りては又大變な間違が出来る二乗聲聞の根性に成ると却てマラナイ又飛花落葉を感じる縁覺になつても困るサリトテ今時學生中に不可解と叫て華嚴の瀧に投身し苦悶の餘り淺間山の噴火口へ飛び込むやうな不心得千万の者が出來ては言語同斷のことである 至道無難である毫末も差を生ずると天地も昏ならずだから片方へ斗り片寄つては大變な間違いとなる譬へば此間淺草に火事があつて風が烈い爲めに百九十何戸と云ふを焼き盡す大火となつたソコデ焼け死んでは大變だと云ふので一生懸命逃げ出して吾妻橋の見當か違ふて偶田川へ飛び込で死た人があつたそふだ 火難を避けたはよいが水難でや

られては馬鹿なことだソコヲ釋尊も中道の妙用を深切に示された。中道の妙用とはドーユーことじやソコガ佛々祖々の的傳を得るのじや。的傳とは何じや所謂正法眼藏サ。眼藏の扉を開いて萬象の眞實際を見れば一段の風光畫とも成らず實に愉快で面白いソコの境界を物に譬へて銀椀に雪を盛り明月に驚を藏すと言はれたのじや。申すまでもない銀椀は眞白じやソレに雪を盛つたなら白いものに白いもの。明月と云ふも白いありさまソノ眞白に照り輝やく月の光の中に眞白な驚が藏れたやうである。白いといふ邊からは皆を白い宇宙萬象皆一色である然りと雖も驚は驚よ明ではない雪は雪よ銀ではない。同中に異ありて。異中に同かある。ユハ白い物には限らぬ。水を大海に注が如く風中に橐を鼓するが如しと。橐と云ふは鍛冶屋で使ふフイゴのことじや風の吹て居る中でフイ

ゴ使ふフイゴから吹き出す風と外に吹て居る風と是れ一ツか又別か一ツとも云はれねは別とも言れまいサ。此の同中の異を辨じ異中の同を辨じ得られて歴々分明一點の疑えないから諸佛と凡夫と迷ひと悟りと善と邪と正との本躰も歴々分明に分らねば成らんサ。何を相手に裁判所の厄介に成り警察署に世話を掛る必要が有らふぞ閻魔大王に遠慮するにも及ばず彌陀如來を頼むにも及ぬわけじや。サテ口の先きてはコウわけもなく言はれるが中々實行となると六ヶ敷萬事萬端兩々相對し表裏々々に成て居る世の中を花や紅葉の開落するやうに縦横自在の寒來暑往の妙用か出来るかナ。輕心慢心のハイガラでは迎ても出來ない。脚實地を踏み實參實究。暫時も放過するなくは百丁々々。

類之不齊 混則知處

此二句も前の論に擧げられた同一色の義理を説明せられたのである。類して齊しからずと云ふは銀と雪と月と鶯と其白色は同じやうであるが、其形は違ふて居ると云ふこと、混ざるときは處を知ると云ふは、各自違ふて居る所を示されたのだ。處といふ義か肝要である處は止處と熟字して其の物の居場處じや、儒書にある通り綿蠻たる黄鳥丘隅に止まる其止まる所を知て而して後に止る人をして鳥に如かさらしむ可けんやサーコノ止まるべき所に止ると云ふは不回互の義で經には諸法位に住すと言ふてある頭は必ず一ツで必ず上に居り足は必ず二本で必ず下に居る其居場處か違ふたら大變じや居り場處の上と下と其物の一ツと二本と正反對に隔てはあるけれども其用即ちハタラキは回互婉轉決して區々の物ではない。足の小指の爪の先きへ蚊が一疋トマツテも直に頭がソレ蚊が

來たぞと號令する直に手が動き出しし之を逐ひ除ける其親密なる睦まじさ試に妙々、彼の水と火とは中の惡ひものであるとは誰人も承知して居る然るに其用と處とを得さへすれば水火ほど中の好む者は無い。火は必ず釜の下に居るか好い水は必ず釜の中に居るが好いサー火も水も居場處はチャンと定まつたソコで火も水も各々其本分の作用を活動させて湯か湧く飯が炊げる汁が煮る。萬物の靈長たる人間様もお陰て命が繋ぐことが出来る然し是れは回互する邊で申たまでのこと。若し不回互の様を言はゞ鶴の口端は長く鴨な脛は短い鴉は黒し鶯は白長短黑白皆そのまゝが天真爛漫じや即ち水は冷に止まり火は熱に止り山は高きに止り川は低きに止まり。君九重の奥に止まりおなべどんは釜の前に止まるソコで天下泰平じや然るに世の中はトカク其うは往かぬ。ソコで個人主義とか國

家主義とか帝國主義とか社會主義とか・口角沫を飛して喧いことだ。迷の衆生と悟の佛とか隔歴したり中々天真爛漫の如きは法を明煌々たる寶鏡に照して見ることか出來ぬソコデ佛祖が色を辛苦ナサル、のて次の文句が必要になる

意不在言　來機亦趣

天真獨朗　佛祖の説法を待たず　直下に安心すれば好いのにソコが凡夫て迷執の街たにさまよい　生死の境にうろたへて居るに依て已むを得ずして宗教が必要になる去りながら　結局悟道は水火に遇て冷煖を自知するの外はない　幾等懸河の辯を振ひても言舌の盡せる處でないソコの境准を意は言にあらされどもと云われたのだ　古來より佛祖の言教は月を指すのユビとも云われ門を敲く瓦とも云のて万々止むを得ざる手段じや禪宗坊サンの講話なり説教を聞くと毎々月を指すのユ

ビと云ふことを聞くが　晴れ渡る碧空に月は皓々と光を放て居るが光りの根本はドコで有るやら中々呑み込みが附かぬ人には手眞似て知らせたり　指て教へたりするのが佛祖の説法じや其説法は吾人が自分と自分で光りの根本を見ることの出來るまでの方便であるサー已に自分の眼で月の光りをタレカに見トマア一好い月と感じた時には月と我れと同化したのじや　我心似秋月、碧潭清皎潔、言の葉の及はぬものは秋の夜の限なき空の光なりけり」此に至て前への手眞似したり指をさしたりして教へて貰ふたのは全く皆を夢中の夢の如した　眞實の悟りを得れば指も瓦も無用となる　三乘十二分教畢竟閑文字　然るに世の多くの人は文字言句に執着して聖諦第一義が悟れぬソコデ達磨大師のやうな大豪傑が出て來て大聲疾呼　不立文字教外別傳と喝破せられたのじや　其れ故に意は言

に在らざれども來機亦趣むくサテ來機と云へば向ふから教を
受けやうと云ふて來る人が有りさへすればと云ふ意味で趣の
字は其人の根機次第に相應して其相手に成て往くゆてコ、ガ
實に大事なこととして時節因縁が純熟せんければ幾らエライ師家
に就て勤勉しても發得する所なく却てツヤランと思ふやうな
ことだから忽ち發揮することもある○涅槃經の中にも佛性の義
を知らんと欲せば時節因縁を觀ずべしとあるコノ時節因縁が
不_レ又_レ何處て發現するかも知れんから_レ手の舞ひ足の踏む行住
坐臥由斷なく工夫をせねばならぬソユテ次の二句か必要とな
る

動成窠臼差落顧佇

看よ看よ眼を刮て看よ 天は昔も万物を掩へ地は今も万物を
載せて居る 鶴はカワく 雀はチウく 絲には絲の音もあ

り竹には竹の音がある宇宙の本體は是の如く不動にして現相
妙用は是の如く不差じや 元來此間に迷の悟の佛だの凡夫だ
の隔てを附けべきものは無い 善惡邪正是非曲直の論理を絶
してある 然るに世人は他の言句に轉せられたり 己れの妄
想を逞ましくしたり少ししても動着する所があつたら其れが早
や窠臼である窠臼と云ふは穴のことと北面のクボミの深み所
へ水などか滯るやうに不動不變の眞理に滯りが出來て活潑自
在の本能を失ふことに成る 差へば顧佇に落つとある差字を
僧潔大師信心の銘にも毫厘も差あれば天地はるかに隔たると
仰せられた一寸の喰違ひを生ずれば顧佇に落つ 顧佇と云ふ
は進むに進めず退ぞくに退ぞけす往來中にウロくして居る
有様である顧佇と云ふ二字が當今の學者智者か文字言句にマ
ゴツいて佛祖の眞意を伺かひ得ぬものや 古則公案に妄想を

カワイて心學道話のやうなアニチハ悟りや謎の如きものに至極の大道を比較して居る一智半解の擔板漢を言ひ顯されたのである

背觸俱非 如大火聚

此の二句は如是の法を大火聚に譬へられた大火聚と云ふは大きな火の聚りと云ふので申す迄もないが火は線香ほどの小さいのでも觸つたら直ぐ火傷をする忽ち廣かつては家も焼き人も殺す恐ろしいものは火であるソレガ然かも大火の聚りとあつては寄り付きやうが無いサリトて寄り附かねば背くと云ふもの寄り附て觸れは焼けるサテく何としたものであるふソコが一番工夫のしどころよ 雪峰禪師は三世諸佛大火聚程に在て大法輪を轉すと言はれた 火傷を恐れて遠くから眺めて居ては火は熱いと云ふことの實地に知れる時節かない

門禪師は火焰三世諸佛の爲めに說法し三世諸佛立地に聴くと言はれた 火焰か諸佛の弟子であるやら火焰か諸佛の家であるやら火焰か諸佛の爲めに說法することも有るて有らうし火焰が火焰の爲めに說法することも有るて有らうかソコが各自の眼の着け處である 此の一段の消息は自己に向て詮議すべした

但形文彩即屬染汚

前句の如く背くとも觸るゝとも出來ず 是とも非とも佛とも法とも一切言語文章に形はし得べき者で無い 若し又強て言語に形はし文句に形はすとが有たら其れは即ち汚染と云ふものだ 染汚と云ふはヨコレケガルと云ふとて如是の寶鏡に塵りが掛り曇りが生ずると云ふとじや 文彩とはアヤドルイロドルと云ふ字であるが凡そ言葉に言ひ出したる文句に綴

りたりすることを都べて文彩と云ふたもので 兼て話せし通り天地の眞理に象かないから之れに何とも名の附けやうはないのである 一切衆生に知得させるテダテとして強ひて菩提又は涅槃亦は眞如だの法性だのと色々の名は附けて有るが畢竟ソレが染汚と云ふので即ち如是寶鏡の塵り曇りてある往昔南嶽禪師が曹溪の六祖大師に參せられし時 六祖大師がイキナリに何物か悠塵に來ると問はせられた 其時南岳禪師が 説て一物に似たるも即ち中らすと答たら六祖大師が還て修證を假るやと言はれた 修行するとか悟りを開くとか云ふことが有るかと問われたのじやソレ南岳禪師か修證は無きにしもあらず染汚することは得すと言われた 六祖大師か之を印可せられて只この不染汚これ諸佛の護念したまふ所ぞと言われた 何事に就ても染汚することさへ無いやうに成たら

シメタものじや 前句の中に世縁に隨順して罣礙なしとあるも火焰裡に大法輪を轉ずると云ふのも泥中の蓮と云ふも皆なユ、の境准じや 故福田行誠上人か歌に せめてわと蓮の花は植れとも似は心のにごりなりれり 十日坊の句に 蓮す葉に小便をヒレハ御舍利かな 慈鎮和尚の歌に 蓮す葉の濁りに染まぬ心もて何かは露を玉とあざむく 青巒居士か歌なりとて隨徒から聞いたが 白露を玉とあざむく欺かぬ蓮は見るにまかせたりけん 各々見處のあるものじや誰れか烏の雌雄を辨せんじや愚僧をして言はしめば うなはらのありともしらず 濁り江の蓮すにとれて鳴く蛙かな

夜半正明 天曉不露

この二句に就ては曾て普化禪師の明ト一來や暗ト一打暗ト一來や明ト一打 明暗共に打し來らば一段の風光を見ん 言語

文字を以て形容すべからざる境涯じや。凡夫の肉眼より見れば、夜半は暗いに相違ないけれども、一隻眼より觀來れば、其中に正しく明歷々たる處がある。天曉は夜か明けるので、都べて物の形が顯れて見るわけだか、其中に不露即ちアラワレザル所がある。佛説に、肉眼の八識色別がある。箇々別々に見來て論ずれば千差萬別で、畢竟黑豆勘定じや。此の段は凡夫の迷見と戲論を放下して、一隻眼を開き看よと云ふのである。爲物作則用拔諸苦雖非有爲不是無語。

物とは即ち物質である諸苦とは生老病死の四苦及ひ八苦である。前段に夜半正明かある通り、夜は矢張り暗くて物が見えないう併し夜になればランプあり、灯もあり、凡夫は凡夫相應に便利である約言すれば、凡夫に佛種かあるから、其の佛種を成長して自在の光明を放たなければならぬ。天曉不露かある通

り諸佛か凡夫の中に交りて濟度もせねはならん。其れか即ち物の爲に則となり。應用して諸の苦を抜くのである。然るに物の爲めに則と作つて凡夫の諸苦を抜くのは全く佛祖其れ自身の爲めにするのではないから、總て隨類應導即ち應病與藥て病人次第の藥劑せねはならぬ。必ず是れと定まつたことは無いソコデ。無と云ふかと思へば有と云ふこともあり、恰も醫士が或る精神病の患者を診察したところが、其の病者か至て物を氣にする質であつた(慈翁道話)世の諺に爪を火にくべれば狂人となると申すことを、佛祖の金言の様に信して居た者と見え、然るに或時火鉢の側ぞ爪を剪たものと見へて爪が一ツ火の中へ飛び込んでジリトと燃えてイヤな臭氣がしたのを嗅くと直ちに大變なとをした。私に私に狂人になるのだと思ひ詰めッレカラ後といふものは、飛んだことをした。私に私に狂人

になると云ふので寢ても起ても其事ばかり云ふてトトト狂人となつたソコで或る頓智の醫士が一ツの方便として其患者の見て居る處で爪を剪て火鉢の中に入れバチリトとして焼て見せましたスルト患者は膽を潰して見て居りました尙引續き火のクワシト起て居る中え爪を剪て入れますとジロトと醫者の顔を眺めていましたが醫者かナントモないので患者は不思議そうな顔をして先生そのやうに爪を火にクベテも狂氣になりませんかと問ひかけた醫者はコエダと思ふて大ひに説明した即ち世間の愚人は爪を火にクベレバ狂氣になると云ふが夫れは全く嘘言である決して其様なことばない現在私などはイッテモ火の中へクベテしまふけれど何とも無いと説き立てられて愚者も大に感して今迄の精神病がユロリト直りました實に方便と云ふものはユウイなものよ

ユ一云ふ患者には爪を剪て火の中にクベルのが濟度の妙法じや外に療治の仕方がない現今世の中を見渡せばコレニ類似の患者が澤山居るやうだソコデ佛教を布演するにも心を用ゐね成らぬ有爲に非すと雖も是無語にあらず有爲と云ふは人の作爲を加へて天然でないことを作り拵へることじや眞如法體の當體はそのまゝならば無爲であるがその外の事は多くは有爲であるソコデ物の爲めに則となると云ふに就ては釋尊にも十九出家三十成道八十入涅槃即ち五十年の説法講經の次第順序がある其の説法は皆な言語を離れぬに依て無語とは言はれん無語ではないか其説法が有爲ではない眞如法性ありのまゝの説法であるから語言そのまゝが無爲であるサー皆の人が平生底手の舞足の踏む悉く其儘に無爲の動作とさいなれば誠に申分がないのである故に此の二句を服膺して工夫

するがよい 有爲に非すと雖も衣食なきに非ず 有爲に非ず
と雖とも起臥なきに非ず 有爲に非すと雖も阿屎放尿 着衣
喫飯 生死涅槃なきに非ず 手はたれて足はそらなる男山枯
れたる枝に鳥やすむらん 有爲有爲に非ず 無爲無爲に非ず
即今什麼の行履の處て 洞山云麻三斤

如臨寶鏡 形影相觀 汝不是渠 渠正是汝

これより更に喩を擧げて本體と妙用との關係を述べられしもの
のじや此篇を寶鏡三昧と名けられたのは全く此喩へより名け
られたらしい 寶鏡の二字は前に話した通り天地万物の本體
即ち吾人の本性をさして言われたのじや 鏡は明々歴々たる
ものじやが縁か無ければ何にも映るものでない 縁があれば
一切の万象ありくと其の影か映る 其影は見えるけれども
一物も痕跡を留めない胡漢現し醜美擇ばす大小長短ソノ儘に

映る即ち吾人の心も此通りである心は万境に轉し轉處能曲な
り 心法十方に通貫すであればよいのじや汝は是れ渠に非ず
渠は正しく是れ汝ぞとある 汝と云ふは形のことと渠と云ふ
たは影のことである吾人鏡に向て各自の顔を見るときは鼻の
高いのも眼の丸いのもアリくと見えるが其見えるのが果し
て自分であるか無いか自分であるなら呼て見るが好い返事を
するか 自分でなればソモ何である鼻の高いも眼の丸さも明
々白々自分の影に違ひない一體に影と形との間に自他の區別
か附けられまい 元來自他は不二なものである 諸佛自性の
光明が一切衆生を照すのも一切衆生の心水に眞如の月を宿す
るも無爲のままに寶鏡三昧の外は無い 今この四句丈けて大
教の要點は盡してある 要點を得なければ千句萬言を暗誦す
るも何の所詮もない 酒は知己に逢て吞めは千杯も少し 語

は機に投ぜされは半句も多し

如世嬰兒 五相完具 不去不來 不起不住 婆々和々 有句無句 終不得物 語未正故

これは前に有爲に非すと雖もは無語にあらずと言われた意味の譬で無爲の言語と云ふものはアカチャンのやうなものである。併し前にも云ふた通り譬喩と云ふものは部分的のものであるから。此譬もアカチャンの無我無心の所だけを喩へに取つたものである。嬰兒と云ふは申すまでもないミドリゴと云ふのでグロンゼない子供のことじや。五相と云ふは眼耳鼻舌手足等の五ツは完具と備はつて居るけれども不去不來不起不住と云てマダ往くことも出來ず還ることも出來ず。婆々——和々——と云ふだけで文句のあるやうな無いやうな何が何にやらサツパリ分らんから有句無句と云ふてあるコレはナゼと云

ふに語未た正しからざるが故に所謂有爲に渡らんからである。と云ふのじや(涅槃經)の嬰兒行品と云ふ一段が有て如來の言行を嬰兒に譬へて説き明かされた所がある(文)善男子起住去來不能言語名嬰兒。如來も亦しかなり起つこと能わすて如來終に諸法の相を起さるなり住すること能わすとは如來は一切の法に着せざるなり。來ること能わすとは如來の身行に動搖あることなきなり。去ること能わすとは如來すてに大涅槃に至ればなり。語ること能わすとは如來は一切衆生の爲めに諸法演説すと雖も實は所説なければなり何を以ての故に所説あれば有爲の法と名く如來世尊は是れ有爲に非ず是故に無説なり云々。ケ様に説きてあるのを引き來て。前に有爲に非すと雖も是れ無語に非すと云ふて置いたのを更にコ、に此の語を擧げて説き明かされたのである。要するに佛祖か一切衆生濟度

のため種々以方便せられしも 畢竟無我無人の運用動作で寸毫も着相の無い所を譬へられたまでのことであるサー次の譬へは少しくヨミ入て居る

重離六爻 偏正回互 疊而爲三 變盡爲五

此の十六字に言ひあらしたのは儒典の易經を引て來られた何の爲めにユノ卦を引用されたかと云ふに一切諸法の變遷無量なるを示されたので宇宙萬象の妙用は平等の本體より千差萬別すると雖も本體を離れず差別そのまゝが本體々々其まゝが差別であることをあらわされた 易の六十四卦の内重離六爻の變卦を擧て話すも随分面倒である 然し洞山五位君臣と云ふ妙理もコレカラ起た事であるから五位の事を述へて見やう

正中偏 偏中正 正中來 偏中至 兼中到

これか五位といふのじや 正と云ふは乾坤平等の實在偏といふのは萬象差別のこと 正中偏は平等の中に差別あり 偏中正は差別の中に平等がある 理事一致を示された 曹山大師は「正位即ち空にして本來無一物偏位は即ち色にして萬象歴然 正中偏は理にそむいて事につき 偏中正は事を捨て、理に入るのである 兼帯は宜しく衆縁に應じて諸有に墮せず 染にあらず淨にあらず 正にあらず故にこれ虛玄の大道 無着の眞宗といふ」兼帯とあるは兼中到の位で此の三ッは台家の三諦即ち空 假 中にも立てるとか出来る 禪家では正中偏に事法界 偏中正は理法界 正中來は理事無礙法界 偏中至は事々無礙法界 兼中到は 四法界以上と立つることもある 洞山大師の五位頌の本文並に略解を示して見やす

○正中偏

○三更初夜月明前

莫怪相逢不相識

隱々猶懷舊日研

○偏中正

失鏡老婆逢台鏡

分明覲面別無真

休更迷頭還認影

○正中來

無中有路隔塵埃

但能不觸當今諱

也勝前朝斷舌才

○偏中至

兩刃交鋒不用避

好手猶如火裡蓮

宛然自有沖天氣

○兼中到

不墮有無誰敢和

人々盡欲出常派

折合還掃炭裡產

サテ前に申した通り正といふのは天地の本體。偏といふのは天地の現象で、森羅萬象サマ〜の形相は皆なこの偏の字を以て示されたのである。正の方は本體であるから空中無物のやうじやかその中に森羅萬象の實在は認めねばならぬ。古歌

にも「思ひ入たぬしもなき大そらの中には漏る海山もなし」其現相は箇々別々であるが、元是れ正中より現はれたるものであるから、三更初夜月明前、相逢て識すといふもの、隱々猶舊日の研を懷ふドコトナシ親みかあるのである。即ち天地萬物一味平等の眞如から出たといふことじや、偏中正となるこれか反對で天地萬物を一味平等の眞如に歸結させたのであるから現象はサマ〜あるが本體は一ツであるといふのだ。正中偏は本體より現象も見たのである。偏中正は現相より本體を見たので、見方は違ふけれども其實は同一心理の兩方面である。即ち先きの正中偏は平等そのまゝに差別と見たのでこの偏中正は差別そのまゝ平等と見たので、共に平等即差別の心理を道破したのである。以上の二ツは天地の本體と現相との關係を示したのである。其次の正中來と偏

中至とは共に兼中到の極致に到るの手段たるにすぎないのである。即ち其手段は正の方から達せると偏方から達するのとある。コノ正中來といふのは正の方から行くので吾人か天地萬物平等一如の所に合點かゆけは差別の萬法に處して自由自在を得ることが出来る。コノ空界無物の正中に一ツの道がある。一切の理窟を離れ都ての塵埃を隔てゝをる。只此の道に任せて理屈も議論もなく平等本體そのまゝに打ち任せて寸毫も疑なければ其理屈も議論もない所か。雄辯滔々他をして口を開かしめぬ才智にも優るのである。(斷舌の才智とは世間に物を言はせぬ雄辯で隋の李知章を指したるものであるといふことだ) コレハ正中來の方である。偏中至といふは正中來と反對て差別のあるまゝに縁に隨ひ機に應じてゆくので。恰も敵と味方と兩刃を相交へて戦ふ如く自分の力を以て進むので。少

しても油斷をすれば命かないのであるから。六塵五慾の煩惱妄想の中にあつて少しも味まされぬこと。火中の蓮の如く自由自在なのでこれを形容して宛然自から冲天氣ありといふたのである。即ち正中來の方は一筋に疑はすしてゆき偏中至は自力で捌てゆくので。先きのを他方に譬へればこれは自力である。此二ツの方からゆくところは。兼中到である。コレハ天地の妙用のあらわれた所で。兼といふのは正偏ともに一味になつた所で事と理との合一したのじや。此の事理無礙なるものがヤガテ事々無礙となるので有とか無とか生とと死とかいふ一切の相對を絶した所で誰れも何ともいひやうのない境界で。去るべき煩惱もなければ欣ふべき菩提もない。ソレニ今迄は常流を出てゝ其源泉に至らうとしたのであるが實際コノ境界に至れば。折合還歸して炭裏に坐すて別段變たことはない。

コ、ニ自由自在な働きがあるのであるコ、が臨濟大師人境俱不奪といはれた境界じや 石頭希遷禪師も參同契に門々一切の境回互と不回互と回して而して更に相渉る爾らされは位に依て住すいわれた以上は簡單なる提唱であつたか 畢竟如是の法の本體妙用なることを示されたのじや各自ヨロシク眞意のある所を味ふべしだ

如莖艸味 如金剛杵

この句は三疊五變の道理を更に明かに示されたのである莖艸と云ふ草は一名五味種とも云ふて其艸は五ツの徳を具へてをる即ち五ツ通りの味がある皮と肉は甘くて酸いが其の核の中は辛くて苦い而して總體に鹹氣があると云ふ 金剛杵と云ふのは現時眞言宗で用へて居る五鈷と云ふものゝことて中が一本で兩方の端が五本に成て居るコレハ言家の教相て五形だの

五色だの五智又は五佛及び五方だの云ふことを表し凡夫の身も佛の身も都て皆この五ツの外に出でないと云ふ表彰の物である天地間の有りと有らゆる物みなコノ道理て一とも云はれぬ多とも言はれないこの道理が眞實自分の物に成て平生底得られぬやうにさへ成ればソレガ即ち菩薩行なり諸佛の行である品々自己に向て參究か大切である

正中妙挾 敲唱雙舉

正中と云ふは平等の本體すなはち眞如法性で吾人の心の本性を指したのだ 妙挾の挾字はサシハサムと讀む字であるから他の物を附け加へる意味になる 要するに平等本體の鏡に干差万別なる妙用の影か映る景狀を言われたのじや ソコデ之れを佛祖と衆生すなはち師匠と弟子との關係にすれば 敲唱雙舉くると云ふのでドチテへも片落のせぬやう 竹に雀梅に

驚と云ふたやうなアンハイに感應道交するのである。敲はマ
ク唱はトナヘルて此れは音楽上の熟語であるコ、ては問へ
ッ答いつすること、見てもよい。要するに師匠か弟子を接得
する間の親密なるありさまであるから敲唱双舉と云ふ字は活
殺自在ともして見るもよろしい。兎に角實證實悟か肝心であ
る。

通宗通塗 挾帶挾路

此の二句は前の二句を一層詳しく解釋を施したとも云ふべき
じゃ。宗とは即ち宗致又は宗旨宗乘等の熟字で。所謂正中妙
挾の眞理實相を指す。塗の字は道途の意味で即ち教導化導な
と云ふ導の字のことと見て宜しい。挾帶と云ふはサシハサミ
オビルと讀むから。前の妙挾と同じこととて宗に通ずるありさ
まを云ふたのじゃ。挾路はミチヲサシハサムのであるから即

ち道に通ずる景狀であるソコデ此の二句を組立て直して挾帶
通宗挾路通塗として見れば早く意味が分る。前に申した通り
韻文と云ふものは韻字の都合で言句を前後せねはならぬこと
も作例が澤山あるソコデ此の句もコウ成で居る。今云ふやう
に挾帶して宗に通じ挾路して塗に通すと讀てさい見れば差別
の萬法を挾み帶ひたまゝに平等一如の眞宗に通じ師弟敲唱の
路ゆきを挾みて感應道交の化塗に通ずるを云ふのじゃ。

錯然則吉 不可犯忤

錯然は肅慎のかたちである錯は交錯を云ふ交錯とは種々な物
の入雜りて居るすがたである申迄もない肅慎とは敬正ツ、シ
ム即ち慎重の態度である。易經の辭に履むと錯然たり之を敬
すれば咎なしとある。今コ、では妙挾差別であるから。正中
の平等を失はぬやうにせねば成らぬソーシテゆけば吉なり。

この吉の字吉凶の熟字として易學者が常に使ふて居る「易の辭」としても差支ない。先づ吉祥々々大吉祥と見てをくかよひ犯はナカスベカラズ。犯はナカス忤はサカラウと讀むて孰れも違背衝突することである。ソノ意味は一方に偏せぬやうにとの注意である。即ち妄想煩惱に執着せざるやう。又菩提涅槃にも腰しかけぬやう。正中に住せよといふのじや。一切衆生は喜怒哀樂等の七情に自縛して父母未生前本來の面目に立ちて向上向下の妙用か出来ぬ自力と稱して我慢を増長し。他力を信して奴隷となる畢竟自他平等を失はぬやうにせねば成らぬぞ。

天真而妙 不屬迷悟

天真と云ふは即ち如是の法じや。如是の法とは吾人具足底の心性である。心性と云ふものは法爾法性自然の眞實である。

俗に天然と云ふ天と云ふは誰れが造つたのでもなければ誰れか支配するのでもない本來コノまゝに如是であるから天然と云ふまでのと。眞と云ふも眞妄相對の言ではない。單に虚妄を絶ちたる所の絶對の眞そのまゝである。ソノ天然のありさまを假りに眞の字を附けたのである。箇々内具の心性か即ち天真である。アカチャンがオギャ〜と啼て居る聲に天真のありさまか聞ける。ソノ啼く聲は喜怒哀樂を離れ權利の義務のとヤカマシイ理屈もない。花の開く葉の落るも天真にして妙である。花の開く誰れに對する義務と云ふわけでも無い。葉の落る誰れに對する權利でもない。増愛を絶ち捨を除く天碌々地碌々活々潑々花の開く葉の落る如く歴々分明じや。吾人本具の心性コノと何の擇む所るかあるじや。凡智の造作さへ加へなければ。花の開く如く葉の落るか如く煩惱即菩提生

死即涅槃 そのまゝに面白き運轉作用であるコノ間何の迷とか悟とか云ふ商量があるものぞ 迷悟に屬せすと云ふも 箭過新羅 じゃ

因縁時節 寂然照著

涅槃經の第二十六卷に「佛性の義を知らんと欲せば應に時節因縁を感すべし」とある會て百丈禪師か之れを拈提して時節若し至れば其理おのつから彰ると云われたことがある 實に此の時節因縁が大節であるイツガ其時節であると定めるとも出來す何が因縁であると極めることも出來ぬ 釋尊は一麻一麥端座六年久しき御修行遊ばされ十二月八日曉天の明星を認め豁然大悟し玉へ(嗚呼奇哉一切衆生悉有佛性)と叫ひ玉へしとある 然らば十二月八日は誰れても悟れる時節で古來より臘八接心とて特に諸叢林では徹夜して接心するか必ず八日の明星を

認めて大悟徹底するかと云ふにソ一ハ往かない十二月八日は毎年あるし明星は毎朝見へるけれども 其の後震旦扶桑各高僧方の傳記を讀んでも 十二月八日明星一見大悟徹底と云ふ此時節此因縁で大事畢了と云ふ話も聞かぬ 往昔德山禪師はティテンを吹き滅され大悟し 雲門禪師は足を折て徹底したとある 脚を折て大悟が出來れば日露戰爭で澤山知識宗匠が出來る筈だかソ一ハ往かぬ 趙州禪師は坐觀究三十年と云われた トコロが永嘉大師のやうな一宿覺もあるトテモ今生ては大悟徹底は六ヶ布と明らめて居たのに撃竹一聲に徹底せし香嚴禪師もあるから 行住坐臥に此事を胸間に掛在して片時も忘れぬやうにしてさい居れば 別に十二月八日明星一見でなくも脚折禪師を學ばすとも 時節到來 因縁純熟の場合がある 何ぞ撃竹の聲を聞いてスツカリ際立た事があつて投機の

偈でも綴り師家面前に印可を受けねは成らぬやうに思ふことは無いよ 併レソレハ儀式として入用なりとあれは別問題として 實地の事はソレばかり極りきつたものでは無い 譬へは總身ツブ濡れに濡れるには海や河へザンブと飛ひ込まなくとも 濡れる時には雨や霧の中を歩いて居るうちにツイ濡れたともなくツブ濡れになる事もある様なものじや サリナガラ達磨門下の正修行は 單刀直入 頓中の頓を尙ぶものだから 一朝直入如來地 スカリト水際を立て海の底を一廻轉して來るやうな境界となれば夫くは愉絶快絶だ 今コ、に云ふのは平生心是道心として行住坐臥に放逸せぬやうにするか 好い 放逸さいせんければ屹度其時節が到來する 必ず其因縁が純熟する 時節到來因縁純熟さへすれば 必ず迷悟に屬せざる天眞の妙が寂然として照著するに違ひなし 寂然と云

ふ字は 易の繫辭に寂然として動せず 遂に天下の故に通すとあるこの寂然の意味も同じやうな味ひがある 照著とは 禮記に照著して息まざる者は天の天たる所以なり 照著して動かざるものは地の地たる所以なりとある即ち天地は天地の本分を全たうして暫時も放過せず少しも動着せぬ景況を形容したのじや 吾人も各々其本分を全たうし照著として息まらず 照著として動かぬと云ふ所にさへ安心立命すればソレが即ち迷悟に屬せぬ天眞の妙じや

細入無間大絶方所

無間と云ふは スキマナシと云ふこととスキマが無いければ細大を論ずる餘地がないのであるが至つてコマカイと云ふとを形容して細入無間と云ふたのである 方所を絶すと云ふも其通りで此は東彼は西と云ふ方角を指すのは絶對でない相對

てある。今は此方も彼所も絶した即ち無東西で細大方所の論議は無用である。且はらく廣大なるを示す爲に「一」形容したのである實に如是の法は無間である絶方所である細大廉小の論理を離れて居るソーンして三世十方に通貫し普遍して居るのじや。恰も小なる鏡を以て大なる大山高嶺に向て見れば巍然たる富士山も寸分違はず全體を寫し。潭々たる江河に向て見れば幾千幾万樹とも量られぬ水も「一」と小なる鏡に映る「一」此に至れば大小なし細粗なしだ。僅に一寸二寸に足らぬ鏡の中に森羅万象を一時に入れて邪魔にも成らぬ。ソレを邪魔にするは意識の分別である。清淨無垢なる眼鏡は相ひ對すれば「一」と映つる「一」の道理を會得させる爲めに佛祖は御骨を折られたのだ。たゞこの細には無間に入り大には方所を絶する天真の妙を知らせやうとの大慈大悲じや。各自に自

己に向て返照せよ

毫忽之差 不應律呂

毫忽と云ふはスコシ又はワズカと云ふ意味。字義は一尺を十分したのか一寸で一寸を十分したのが一分一分を十に分けたのが一厘一厘の十分の一が一毫であるそれから一糸一忽となるので一忽と云ふのは蠶が吐き出したばかりの糸の太さのことである。律呂と云ふは。音樂上六律六呂と云ふことがある。金石絲竹匏土草木と云ふ八ツの物から音を出すのが即ち八音で其の陰聲と陽聲がある。其陽聲の六ツが六律で陰聲の六ツが六呂と云ふのだ。二六十二月に配當して十二律と稱したもののじや。要するに都ての物から出る音に天然と定まつた調子がある。即ち金には金の音があり木には木の音があり「一」ユデ其れ等の色々の音を鳴らし合せて一種美妙に和合した音

を造り出させて耳を喜はせるのが所謂音楽であるソノ色々の音を和合させるに附けて都へての音の性質を六律と六呂と十二に定めたものである。然るに此の色々の音を和合させると云ふことは中々困難である。同じ三味線や琴のやうな線ばかりのものでもさへも三味線なれば一の線二の線と三の線と三本段々細く成て居るから太いのは太い音を出し細いのは細い音を出し其音は皆別々だけれども其間に調子と云ふものは只だ一つで太いのも細いのも同じ調子に成る其れを調子が合ふたと云ふので若しも其調子が合はなんだ時には聞かれるものではない。況んや此を性質の變つた笛と胡弓とか云ふものと合せやうとするには餘程熟練をせねば中々調子が合ぬものである。天地萬物皆其通りて天真にして妙なるには相違ないけれども毫忽とワズカでも調子が違ふたなら醜態極ることにな

るソコデ音楽を合するには調子笛と云ふものが有て一人が其調子笛を鳴らすと外の三味線引きも胡弓摺りも皆其調子笛に合せて一つ調子を取るソレと同じことで。佛祖が三千年來嬌々相承して眞理の調子笛を吹き來たのであるから其調子笛に毫忽も差はぬやうに調子を合せさいすれば太鼓も笛も琴も胡弓も琵琶も皆別々の音聲のまゝで一つ調子の合奏か出来るやうに天地法界一大樂器と成て來るソコデ石女舞成長壽曲。木人唱起太平歌と云ふ演劇も始まる然し木人とか石女とか云ふと別物のやうに思ふも知れんが。君父が歌ふて臣子か舞ふ之れを仁慈忠孝の曲と云ふのである夫婦兄弟姉妹朋友も準して知るべしだ。若し此曲の調子が合ねば世が亂れる國が治まらぬ家が亡れば身をも失ふやうに成るから調子が肝要である。今有頓漸。緣立宗趣。宗趣分矣。即是規矩。

此の四句は佛教の總體の上に就て述べられたのじや 佛教の言
 教は元より應病與藥であるから相手次第に調子笛を吹かせら
 れるソコデ聞くものの耳次第で色々の音がするやうに聞くの
 であるソレヲ佛は一音を以て法を演説したまへども衆生は類
 に隨て各々解を得ると云ふてある 佛の方は色々の法があつ
 て色々なことを言われるのではない 要する所は天真にして
 妙なる如是の法を證得させやうと思しめすの外は無いのであ
 るけれども衆生の方は機根の利鈍もあれば所謂時節因縁の熟
 不熟もあるソコデ一代五十年の説法も一千七百則の公案も千
 差萬別のやうに見いて五時八教十二部教頓漸顯密とか聖道淨
 道とか種々判教名目が附て来るソコヲ達磨大師はキハリト片
 附させる爲に不立文字教外別傳直指人心見性成佛と喝破され
 た それでも其門下に五代ほと經た頃には南頓北漸の二流に

分れるやうに成たコレ一體何故にコウ云ふことが起るのであ
 るかと云ふに各自の宗趣とする所か違ふからのことじや 宗
 と云ふは前に申した通り尊崇の義二つとない最上の意味であ
 る俗に宗家又本家と云ふことと本より如是の法より外に宗と
 すべきものは無いからコレに差別は無いけれども其宗とする
 所に趣向する道ゆきが色々分れる其れか即ち趣と云ふので其
 道ゆきが違ふために宗とする所の見込が違つて見ゆるやうに
 成るから頓漸顯密聖淨禪など云ふ色々な宗趣か立つのじや
 已に宗趣か立て見れば顯教には顯教の規矩かあり密教には密
 教の規矩かあるソコの所を宗趣分る是れ規矩なりと云ふたの
 じや 然らば其規矩に依り其宗趣を極ると云ふことはドレ程
 の仕事であるかと云ふと彼の調子笛を吹くまでだ 且らく其
 調子の合ふまでのことである

宗通趣極 眞常流注 外寂内搖 繫駒伏鼠

頓漸顯密禪淨なぞと云ふ各宗サマシの趣向の奥義を極め盡し其目的とする所の宗旨 即ち寶鏡三味の寂然 照著に通達したと云ふても其れはマタシ眞常の流注と云ふもので 外面ばかり寂靜に見いても内心は相變らず動搖して居のじや 譬へは春駒の跳ね廻るのを無理に木などへ繫きたやうなもの 又行き當り次第に嚙り散らす徒らな鼠を函の隅に押し伏せて置くやうなもの と云ふ意味である 眞常とは即ち眞如常住と云ふこととして一往は佛教の目的とする所であるが再往佛祖單傳の見地よりすれば白雲萬里だ 苟くも達磨門下の衲衣下は佛を殺し祖を殺し其死骸は茶畑の肥料にてもせよと云ふ意氣衝天の禪學者が宗旨だの趣向だのと云ふことに腰を掛けて居るやうては馬や鼠の同類と罵倒されても一言もあるまへ 昔

し靈雲禪師の所へ或る僧か往て直に純清絶點を得るとき如何と問ふた 靈雲答云「猶是直常の流注」僧又問ふ「如何なるか是真淨の流注」靈雲曰く「鏡の長なへに明かなるに似たり」僧又問「向上更に事ありや」靈雲曰く「有り」僧云「如何なるか是向上事」靈雲云「鏡を打破來れ汝と親く相見せん」サーコハの處はドーダ鏡には元來何の罪もないけれども長なへに明かなる所に腰を掛けるから仕方が無い 腰掛けさせまいとて鏡を打破る 腰さい掛けねば鏡は元來調法の道具である 流注とは煩惱妄想を河の流に譬へたので流轉と云ふも輪廻と云ふも同じ意味じやソコ眞常の流注と云ふことを約言すれば 大悟却迷で誠に除き難い障害物となつて彼の天魔と同類に陥り一智半解の即擔板漢が悟りを擔き廻り鬼の首でも取たやうに思ふて居る各自宜しく注意せよだ

先聖悲之 爲法檀度 隨其顛倒 以緇爲素

先聖とは歴代の祖師方を指したのじや 法とは万法のことて 釋尊御一代の經律は申すに及はす千七百則の公案も皆な法の一字にこもつて居る 檀とは委しくは檀那と云ふ度と云ふは梵語では波羅密と云いこと具さには檀那波羅密を省畧して檀度と云ふたのじや 檀那すなはち布施である布施に三通りあるか今は其中の法施である歴代の佛祖方か吾々衆生の爲めに法を施す即ち施主と爲て吾々衆生に法を恤み玉ふのであるドシ風に恤まるゝぞ其顛倒に隨て緇を以て素と爲す之れは衆生の顛倒に逆らはすに緇と黒いものを素と白いやうに云ふたり 同しことを或時は有と云ひ或時は無と云われたのは枯れ枝を揮て小兒の泣き聲を止むるの手段に過ぎぬのである 顛倒とはサカサマと云ふ即ち淨樂我常の四顛倒と云ふことは説教

師などの話で皆も聞て居るからコ、て操り返す必要もなかるふ 或る僧か趙州禪師に問て云く狗子に還て佛性ありや亦否や 趙荔云く「無」然らば趙州は狗子に佛性なしと定めたか否 或時は「有」と答へたコレはドーシタ譯けた 言語伎倆の邊際を絶したとじや コ、ガ佛祖が法の檀度と爲ると云ふのはコ、ヲあたりの調子である 然るに多くは有無の間に滞りて中々脱洒に往きかぬる人が澤山ある コ、て洗面一回廓然大悟と成ると今度はまたドーナルぞ

顛倒想滅 肯心自許

トカク吾人は何事も分別して見ねば氣が濟ぬと見いて狗子に佛性の有無を論じて見たり 佛に犬の性か有るか無いかを調べて見たりコノ様の顛倒忘想か滅して見れば今度は肯心自から許すと云ふて 此れに違ひない斷定して動かぬように成て

ソロ／＼大氣焰を吐く 畢竟釋迦も達磨も眼中の塵と吹き飛
 すエライ意氣込に成るじやコレナ古へより金鎖に譬へてある
 前の顛倒想は鐵の鎖に繋がれて獄中に苦むやうなもの 後
 の肯心自ら許すといふは 金の鎖りに縛られて自分の部屋に
 幽閉されて居るやうなものじや 曹山大師の話に「凡情聖見是
 れ金鎖玄關直に須からく回互すべし」と云たのがある凡夫の情
 想は論の無いこととて聖者の見識も亦煩らひじや直ちに須らく
 回互せよとあるコ、デは回互と云ふ字を却來退歩と見るがよ
 い 承陽大師が「證眼を廻らして行地を望めば更に一翳の眼を
 遮る無し將に見んとすれば白雲万里」と申された肝要なる一語
 を加へて置かれた此に於て退歩せば佛地を勃跳せん」トカク
 極樂を願ふ人か公園地へても散歩に行く如きに思ふて居るソ
 レハ大間違た浄土門の聖教中にも樂の爲めに性を願ふものは

往生を許ちぬと書てあり眞宗の教義ては還相回向と云ふこと
 を此上も無き大切なことゝ定めてある還相と云ふはカヘルヌ
 ガタじや極樂から娑婆へ立戻つて來るアリサマと云ふのであ
 るソレデコソ極樂も難有サモナクテ極樂は怠惰ものゝ集合場
 と成てしまふ 淨土門てさへ其通りじや況んやコ、デ其儘と
 ある禪宗で肯心自ら許すなどは誠に耻かしいことである

要合古轍 請觀前古 佛道垂成 十劫觀樹

古轍とは古人のアトと云ふこととて箇様な故事を引かれたのは
 (法華經)の化城喻品に在る大通知勝佛の故事じや尤も其經文の
 意味を全たく此に應用せられたわけではないけれども其故事
 と云ふのは過去昔の世に大通知勝佛と云ふ佛が有て其佛が凡
 夫の時から段々修行に依て愈よ佛果を證得しやうと云ふ途端
 に成てから十劫と云ふ長い間ドウ云ふものか諸佛の法が現前

せんでボンヤリ坐禪をして居られたと云ふ話であるが十劫でも五劫でも其んな文字に拘はるにも及ばず又強て大通知勝佛に限つたわけでも有まいがトニカクに佛法とか大悟とか云ふものが氣に掛つて居るうちは決して徹底するとは出来ぬと云ふのです 貪欲だの瞋恚だのと云ふ荒々しい病は誰にも病と知れるが 戒とか定とか云ふ薬の効も能く知れるけれども其薬の効能を頼みにする了簡甚た高尚の病氣であるから其れは中々抜けにくいに依て前に眞常の流注と叱咤し繋げる駒伏せる鼠に喩へられて有たが今コ、に更に誠められるのは其よりもマダ一層細かな病氣で薬りの効用を頼む所をも通り過ぎてやゝもすれば健康の自慢をする僻のあるやうなものじや 觀樹と云ふこと經文には觀樹亦經行とある坐禪するときとは必ず時々はその坐を起てキンヒント申して僧堂内にカケ足

で歩むとがある 觀樹と云ふは坐禪でもなく經行でもなく卓然と秀てゝ居る大木などをジツと見つめるのであるコレハ風の無い夕方などに椽側なり又歩みながらも静な所の大木と睨合をすると自すと心境清靜に成て何とも言へぬ好い心もちなものであるソコデ觀樹の二字を今は坐禪と云ふことに應用したのである

如虎之缺 如馬之驛

虎の缺と云ふことは(玄義)虎の人を傷つくること一度すれば耳に一缺を生ずとあるコレは我行ひの上から天然無疵の身に缺痕を出すと云ふことを譬喩に取て本來圓成の天真佛であるのもを強て凡夫の情想を以て更に佛に成らうとか菩提を得やうとか思ふ所から天然自性の本佛に疵を附けると云ふことに比例せられたものである 馬の驛の如しと云ふは驛の字か色々

の説を立てあるが 字書の注に據れば馬の後ろ左りの足の白きなりとある。其の白き毛のことを日本では通俗にヨメと云ふと申してあ(異説異聞)る且つ其の生れ附きの天然でない色の毛か生いると云ふことが前きの虎の缺と適對になつて面白いやうに思ふ。范石湖の句に有足似羈驥と 羈驥と熟字するときは驥はツナク又はホダスと云ふ意味になる。コレハ足を縛られて居て自由に走ることが出来ぬと云ふ意味になる。前句に佛道として成するに垂々として十劫か間觀樹したけれども佛法不現前不得成佛道であつたと云ふ所の譬にすれば羈驥の義でも適ふやうである。

以有下劣 寶兀珍御 以有驚異 狸奴白牯

此の四句一對は前段の病的の有様を言ひあらはしたので一體に下劣の根性が有るから寶兀珍御の尊貴を有り難いとやのう

に思ひ又驚異とオドロキアヤシム心か有るから狸奴や白牯を厭ふ料簡も起る。厭ふ料簡が起るから之を濟度しやうと云ふ願心も起りソレに就ては先づ自分か寶兀珍御の如來に成らなければ成らんと云ふ望みも生じて到頭本來成佛の自性を忘れロザく疵物にするのである。元來法界には佛もなく祖もなく衆生もなしだ。然るにありもせぬ佛祖に成りたいと云ふ十劫かチロカ百劫千劫の觀樹經行したからとてドーシテ佛法と云ふものが別段に現前するものか。若し別段に現前するものが有たなら其れは決して自家の傳家寶でない。門より入るものは家珍にあらず。其處の有様を此の四句に書き流したのである。「然るに古より種々を見識を立て、上の二句は法身邊て下の二句は異類中行じやなどと云ふ人もある」字句解釋はともかく論することは無用だ。寶兀珍御と云ふことは大乘妙

典「信解品」に佛を富貴尊嚴なる長者に譬へ凡夫を其子か意志下劣て乞食に落零れたのに比較した譬喩が有る。寶元珍御すなばち長者の富貴な生活の様子を形容した文字を直に佛のととし單に下劣の二字を以て衆生のことに見なしたのである。下劣と云ふは自分で自分を賤んで己れか現に大福長者の子で有りなから一念反省して我れは長者の嫡子ぞと徹底覺悟することが出来れば其儘に寶元珍御が皆自分のものじや。驚異と云ふ二字は地獄に落ちるぞと聞いては心に驚き其れは恐ろしいことであると思ひ修羅とか餓鬼とか聞いては其れはド！云ふもので有りふぞと怪みサ！此の怪み驚く心が一念でも有たら狸奴白牯のみならず。青鬼赤鬼も劍の山も血の池も忽ちソコへ現はれてくる。然し今コゝてはそんなとを怖れると云ふ程度で云ふたのではない其んなものを濟度しやうと云ふ了

簡が天真で無いと云ふ話しじや。臨濟大師が人地獄如遊園觀と。コゝ云ふ工合でなければ面白くない。劔樹刀山狸奴白牯も亦風流(説文)に狸奴と云ふは狸の屬て鼠を食ふ家に蓄ふが故に狸奴と呼ふとあるサレハ猫のことじや白牯の牯の字は牝牛と云ふ字であるから白牯とは乳牛と見てもよろしい。

羿以巧力 射中百步 箭峰相值 巧力何預

羿ひいと云ふは人の名である此故事は左傳の注疏にも書いて有るか昔の弓を射る名人である。射て百歩に中つと云ふのは楚の國の養由基と云ふ人が百間ほど隔てた所の柳の葉を射るに百發百中して一矢も外れなんだと云ふことが戰國策に書てある其れの韻字で都合て二つの故事を一つにされたものと見えるトニカク羿や養由基のやうな弓の名人は如何なる細小のものでも必ず射中ると云ふのは其れは全く巧力と云ふもので力と

巧みとが肝要なとて有らうけれどもコレは佛教の修行だの證語たの菩提だの涅槃だのと云ふことの有るのを奪ふたのである。禪的達磨の眞面目と云ふ所に成て箇の佛の字を道ふも挖泥帶水箇の禪の字を云ふも滿面の慚惶と云ふ場合に成ては謂ゆる箭鋒相ひ値ふのじやコレに至ては巧みの力のと云ふやうなとの入た話では無い何ともハヤ申しやうの無く考へやうの無い言語同斷心行所滅である。箭鋒相値と云ふ故事も澤山あるか今コレに言われたのは紀昌と飛衛との話であるソレハ列子湯問篇に出て居る。昔し飛衛と云ふ弓の名人があつた其弟子に紀昌と云ふ者が有つて段々と稽古の上達して師匠の飛衛と少しも違わぬやうに成たソレ紀昌が悪心を起して世の中に飛衛さへなければ己れ一人天下の名人として誇る事が出来るソレハ師匠の飛衛を射殺してしまつたと云ふ謀計でイツ

好い機が有たらと思ふて居た所が或時はからずも野中で出合ふたから紀昌は直に一矢を射ると同時に飛衛もスカサバ一矢を放つ如何にも名人と名人のことで有るから双方の矢が途中でカチリと矢尻か中つて二本の矢かバタリと其處へ落ちたと有る。藝術も此に至ては唯微妙と言より外には何とも言ひやうの無い處じや。然しコレらの場合は決して力や巧て往けることでは無い藝とか術とか巧みとか力とか云ふ途中の話は皆な通り抜けた上のことと無ければ此の妙處に至ることは出来んソレデ巧力何ぞ預からんと言われた。佛法も亦必ずコレに至らねは成らん生死だの涅槃だの極樂か有り難い地獄か怖ろしいと云ふて居る間は其れはヨク、初心のことである。愈々修證の玄關をも通りぬけて如是の法の實際に達した日には天真にして妙と云ふより外は無い。然し紀昌や飛衛が箭鋒

相ひ値ふと云ふ妙處に達するまでには多年千辛万苦稽古を經歷した上のごとに相違ない如何に吾々衆生このまゝに本來成佛には相違ないと云ふた所が一旦墮泥したから坐敷に上るには足を洗ふ必要があるソコテ承陽大師が此法は人々分上ゆたかに具わりれと雖も修せざるには顯れず 證せざるには得ること無しと言われた 口ばかり是非善惡得失を明かに辯し得るも足實地を踏まねば此妙處は得られない

木人方歌石女起舞 非情識到寧容思量

此れは甚た奇怪のなごと、思ふ人かあるか之れか如是の法より觀念すれは何にも奇怪ではないアタリマイのとじや 梅には鶯竹には雀で 鶯か法一法華經を講するも天分である雀が忠一勇と喋るも自然の啼きまじや 何にも木の人形か歌ふか石の女か舞ふか少しも疑を容のごとじやない 要するに天眞の

妙そのまゝである然し凡夫の智慮分別では及ぶ所で無いソノ智慮分別を放下し來れ木人は木人石女は石女 梅は梅竹は竹 鶯は鶯雀は雀各自其天分を全ふして居る梅に竹がツゲルものでない雀が鶯の眞似も出来るものでない吾人は吾人の天分を全ふしてゆくのか肝要じや

臣奉於君 子順於父 不順非孝 不奉非輔

此四句一對は講するまでもない誰れでもワカリ切たごとじやサテ其のワカリきつた處即ちありのまゝが如是の法の當體であるトカクこの天眞に背き其本分を味まして君君たらず臣臣たらず父父たらず子子たらず 夫は婦を欺き婦は夫を偽はるソコデ天下は亂れて麻の如しと成る 實に梅に對しても鶯に對してもカレ少しも天分を亂さず時至れば婢娟の花を開き馥郁の香を放ち婉轉たる美音を發し地上の天國を粧ひ自然の音

樂を奏するに附ても吾人甚た耻つべき次第であるソコノ處を
順せざれば孝に非ず奉ぜされは輔に非すと云ふて垂誠された
のである

潜行密用 如愚如魯 但能相續 名主中主

サ一此四句が結句である 君臣父子夫婦兄弟姉妹各自の本來
の面目を誤まらざるアリサマはドンナて有るかと云ふにソレ
ハ潜行密用で愚の如く魯の如くである潜行はヒソカにオコナ
フと云ふので有るから形に顯はして他人に見ゑるやうなもの
ては無い 密用はコマヤカに用ゐるので自分にも隙間は見え
ぬ思慮分別にも及ばず情識の計度をも絶した様な所を愚の如
く魯の如しと云はれたものじや 春風花開き秋霜葉落ち日は
東より西に沈む此間何の誇り顔も何の威張りたる形ちも利口
らしいフリもなく天地万物ことごとく愚の如く魯の如く權利

と云ず義務とも叫ばず黨諍もなく利害もなし唯々平々凡々た
る處が潜行密用のある處じやサ一吾人も君となり臣となり父
となり子となり富貴に處し貧賤に處し唯々是れ平々凡々に愚
の如く魯の如く潜行密用し得て諦當なれば警察も不用裁判も
不用で各自に天分を全ふせば天下泰平万民和樂である 爰に
至て何ぞ天堂地獄とか説かん何の生死涅槃とか論ぜん 但能
く相續すると云ふのが尤も肝要のことである 笑はんと欲せ
ば笑ひ泣かんと欲すれば泣く其儘に天真爛漫で笑ふ其まゝに
妙用現前する此間自然に寸分の隙間の無いのが即ち相續であ
るそれを佛祖の慧命を相讀ずるとも云へは如是の法を受用す
とも云ふのであるサテ其のやうな人のことを何と名けるぞ佛
と呼ぶか祖と稱する乃至惡魔と云ふか聖賢と云ふか又は花と
云ふか月と稱するか何とでも名けるが好いが 今は名けて主

中の主と云ふのじや 一切萬法中賓主の二つに比しコレハ四
賓主中の主中の主である約言すれば花中の花 月中の月と見
るか好ひ即ち人中人 天中天であるマ一之れてやむて置かし

俗語解

曹山釋元恭禪師講本
隨徒吉浦大達筆記

二字部

邏齋 冷齋夜話二嘲羅漢失隊偈 十八聲聞解埵根 少叢林漢亂
山門 不知何處邏齋去 不見雲堂第五尊 恕中錄十一 方廣
寺中半千尊者撥供邏齋 眞和集七八謝蒲鞋偈 成現送來雖著
了 諸方無處可邏齋 釋氏要覽十二 齋不請強往今時撥齋一
云ふ 禪喜集九有撞席撥座之語 臨濟行錄邏蹤人喫棒 破
菴錄五十囉齋打供
曹山云 邏者巡也游偵也撥者捨取也又侵掠也據要覽則 曰

撥供曰遜齋亦撥齋之義也。

探根 傳燈 翠微章。投子禮謝退。師曰莫探却。投子曰時到根

苗自生。會元。探却作探根 聯燈探作探投子章。無去妙可及於汝亦不教汝

探根。圓悟錄。高峰突兀倚天門。青嶂虛閑可探根。應菴錄

送密菴偈。此行將省觀。切忌便探根。松源錄。開口分明便

探根。指天指地獨稱尊。碧巖錄則着語。叢林盛事上。會元二

六十正宗贊六四六五。以上作探根。聯燈廿一。圓悟錄十八。並作

探根。大惠書同普說廿二。作探根。冷齋夜話。作探根。文字

禪三十五作倒根。聯燈九。作倒根。漫錄十九。作倒根。

曹山云。探垂探垂之四字音同義別。根跟之二字音同義亦通

此二字雖出諸書未見注釋右所引書中作探根者多若以之爲正

義則探訓射探垂訓堅土探亦有堅土義植根於堅土則全不動搖

是安住不動之義也。有作倒根或倒跟者倒根則無長生之理倒

跟則無前行之理並是不進義也。經國大典。根隨條。根與跟

同言追蹤而隨也。今參攻諸書其義不一或滯留或安住或鈍根

或得少爲足或自足而不欲進等不可一槩定矣要之以止息其處

住足不進爲本義其餘隨語勢可解之乎

構得。玄沙錄十三。今恁麼方便助汝猶尙不能構得。廣錄十八。備諸

人應須自構始得有相應處始得若構不得只與尋言逐句有什麼

了期。全廿五。若未構得須知盡是虛頭漢法。會元三七。此事如

擊石大似閃電光構得。構不得未免喪身失命。碧巖錄十四。若

不是眼辨手親爭能構得。虛堂錄七六。須知一色明邊外生死如

何構得伊。西巖錄二三。一人構得鼻孔失却眼睛一人構得眼睛失

却鼻孔。玄沙錄七上。勸汝我如今立地待汝構去不用汝加功練行

傳燈十八策進一四。恁麼急功更得人荷挾尅骨究竟不妨易得構

去。

曹山云構は字典成也事已構矣賦詩如宿構。觀亦成也故構觀之二字音義共通。諸錄作構同音假借也事苑五構古俣切成也

巴鼻

圓悟錄十六丁 臆睡歌。懵々懂々無巴無鼻。兀々陶々絕忌諱

蜜菴錄二十東村王老半醉半醒林下道人沒巴沒鼻。碧岩集十一有底云點平胃散一盞來有什麼巴鼻。大慧書十二覺得昏恒沒巴鼻可把捉時便是好消息。陳后山詩話六有甚意頭求富貴沒些巴鼻使姦邪有甚意頭沒些巴鼻。韻府纂要七十三沒巴鼻作事無據也

曹山云 巴は把と同じ道具の柄なり鼻はツマミ處なりとの説あれども沒巴鼻可把捉語によれば把と同じとも云ひかたし又無巴無鼻とありて巴と鼻と別物なれば柄とツマミと二つにも見ゆ 總別俗語は意義はかりにて字義にわかゝらぬこと多し故に強て字義のせんさくはなり難し 扱て諸錄を

検査するに十に八九は巴鼻にて韻府ばかり把鼻と傳ひあり巴と把とは平仄も違ひますが音の誤りは俗語には多くある事ていづれも把柄の轉音であるまいか唐話纂要七把鼻。憑據。即ち證據である沒巴鼻は捉ひ處なき事なり 該書を據にして著者の意を失わさる様譯するを好とす 此外巴字を應用せし俗語の内に「打巴掌」手の平にて面をうつ事なり 郷巴老とは田舎もので有る此熟字は類書廿三に記載せり

饒三

讀燈十四 浮山章。敵手知音當機不讓若是綴五饒三又通一路始得。王荆公詩話。太宗時有侍詔買玄者常侍上恭 大宗

饒玄三子女常輸一路乃大宗曰我饒汝子。今而局平是汝不勝也見事文類聚前集四十二ノ十。鄭谷寄碁客詩。幾局賭山水。一先饒海僧曹山云 饒は多也の義にて碁を打に劣りたる方より石を先に置く事を饒と云ふ即ち饒三は三目置く事綴五は五目おく

事。綴は形を以ていひ饒は教を以て云ふ也。碧巖錄三一箭尋常落一雕更加一箭已相饒。頌古集二十四西誠真金須入火再三鍛鍊見龜上行買賣不不饒讓好物從來價自殊。類書纂要二十七饒販。注多餘也。

曹山曰 碧巖相饒の語兩説あり一は字典に俗謂寬恕曰饒の義にて罪を許す意一は饒敗商賈の添物又は割引の義なく頌古の意も饒は賣物を添ゆる意と見るべし板本の抄に饒は賣買上利子をまけてやるを相饒と云ふ少しも譲らぬ的を不會饒と云ふこゝてわ一矢を加えてまけられたれども帝不契。直に歸つたぞとあり今兩説を以て一句の意を解するに初めには其上一矢を添えたれど落す機を得ない前は武帝を許してやり後は矢をまけてやり始終矢にかけて見る方可ならん饒の字義似たる故附記しをく

向道

類書^{十二} 智門願侍者云向備道全得這箇力。傳燈^六 馬祖謂

鄧隱峰向備道石頭路滑。碧巖第一則着語云果然把不住向道不唧啾。虛堂^三 向道莫行山下路果然猿叫斷腸聲。書言故事

^{十八} 向道是龍剛不信果然奪得錦標販

曹山云 向道の二字通途は中の汝或他の字を畧したばかりにて字面の通り也一種處によりなんといわぬ事と乎と譯す其時は必ず前後に果然の語あり。案の如く違わぬ也馬祖の語も果然として滑りこけたの意在言外此時は多くはさき一點してありよく通ずる様なれとも嚮字の意に見るわ非なり

去就

滄山警策梳鉢鉢作聲食畢先去就乖角僧體全無注理事和合

爲僧體去就既不如法何僧體之有耶^{指南} 乖角者不合禮法非僧

體也。碧巖^四 一師願視左右云這裡還有祖師麼^{着語} 猶作這去就

禪門寶訓^{十六} 高庵去就衲子所不及^{音義} 去就見處也行事也。

漢書注云去就猶進退也

曹山曰 按警策の意は禮法の進退にかゝりて身の立居ふる
まいの事。ふるまい。しかた。など譯すべし實訓は上の文
を按するに身の上の取置きと譯すべし其内に見極めたる了
簡も有る故見處也行事なりと兩方掛けて注せり全體わ去此
就彼の義にてこゝをのいてあそこえ行くなり。漢書の注本
義也又曰去此就彼とは如何なり去之就之の義ならん然らざ
れば進退の注にかない難し

掠虚

碧巖三十五睦州問僧近離何處乃至僧無語。州便打曰這掠虚

頭漢唐本無頭字六類聚五六此羅帳裏撒眞珠禪容相承總掠虚頭漢。

貞和集十九空山號頌内無一物外何拘百億須彌盡掠虚。事苑

十二掠音略奪取也。古文後集三集昌黎文序悉謂易已下爲文

剽潜竊爲工耳雲門錄十上無備掠虚話大話處

曹山云 掠は事苑の注も古文の意を取り虚は二字ては實頭
又虚頭三字ては朴實頭掠虚頭虚實を對して見れば人の云た
る言句を奪とり我胸中より出たる様詐を云なり只言語はか
りてなく仕方摸様も同し事なり内はからにて皆外から奪ひ
取て來るものばかりそれを我が物顔と云たりしたりする義
である

沙汰

碧巖十二外道於僧寺中封禁鐘鼓爲之沙汰。事苑七十六岩頭遭

會昌沙汰著襴衫戴席帽游諸聚落。佛祖統記六五唐武德九年詔

僧道戒虧闕者悉令罷道各月餘停前沙汰又開元二年沙汰僧尼

僞濫者万二千人並令還俗又會昌五年詔檢校天下寺院僧尼數

兩都左右街敕留寺四所僧各三十人天下州郡各留一寺上寺二

十人中寺十人下寺五人歸俗者二十六萬五百人。後漢賈琮傳

記沙汰勅吏二千石更選清能吏。晉書孫綽傳沙汰瓦礫在後。

王院晋書沙汰勅吏三百人

曹山云 沙汰とは沙石より金をとり分る事也故に宦府より僧尼の善惡を吟味し惡き僧尼を還俗さするを沙汰すと云ふ會昌には善惡に拘はらず僧數を定め其數のみ殘し其餘は殘らず還俗させたる故に岩頭なとも沙汰の人數に入たる也

切脚

類聚^{十八} 僧問洞山一大藏經是箇切脚如何是字母。海會錄

^{十二} 僧問一代時教是個切脚未審切那箇字。師云鉢離穰學々人祇問一字爲什麼却答許多。師云七字八字。虛堂錄^{十一} 人能未展經條入此阿字法門則五千餘卷總是切脚且道切箇什麼字因應庵錄^五 報恩更爲諸人下此切脚毘盧遮那清淨海充滿三千與大千。雲笈七載云押韻從東字至法字數萬着切脚。韻府樂引宋徽宗詩切脚即切韻也。夢溪筆談切脚者上字爲切下字爲韻。本草綱目^{十九} 按韻書蘋在真韻蒲眞切萍在庚韻蒲經切

々脚不同爲物亦異又萍與蘋音雖相近字脚不同形亦向別也。字典切韻要法^九 切字之法如箭射標切脚二字上字爲標下字爲字箭兩字相摩以成聲韻謂之切

曹山云 切脚二字有兩儀一則上字を切となす下字を脚と爲す本綱に所謂上の二蒲字者切也下の眞經の二字者脚也一則切脚不同者謂上字同而下字不同則切之脚也字脚亦同義也古徳の切脚は一字二字に限らず類聚。經書に荅話又は拈語あり。畢意兩義にあらず同義と見るを通語とす

白踢

傳燈^{十四} 石頭問曰汝是參禪僧歟是州縣白踢僧歟。通鑑^{十八}

一白論^二 注白素也釋素餐者以爲空餐白論猶空言也同^七 取才失所先^二 白望而後實事^二 注白望猶虛名。書言故事^{二十} 亦洪崖打白洪崖^二 注空盡無故曰赤白亦無也

曹山云 白踢は遊州獵縣と同意にて行脚しなから參禪の志

なく諸國をふらつきむだ歩きする義なり俗語に白々走と云ふ即ちむだ足を歩む事。白酒難呑とは肴のなき酒は呑まぬと云ふ。以上白の字義分明である

食指

左傳宣公四年子公食指動注第二指也食指者俗所謂噉鹽指也前漢書貨殖傳。童手指千注童者奴婢也手指者謂有巧技者

指千則人百。翰墨全書三賀人開酒舖答書云食指雖多無生計也注食指手之第二指也以指就食謂之……

曹山云 左傳に食指の語ある本文にて明瞭なり漢書は人數

を指にて算する故に全書には入數に用ひたり但し全書の意は家内の食ひ扶知を云ふなり

本色 聯燈十八 黃檗云將謂是本色納子元來義學沙門。林間錄二上

其天資粹美如此真本色住山人也。唐書柳仲郢傳有劉習者以

藥術進詔置判官仲郢以為醫有本色宦若委錢穀名分不正。寒

山詩三上三天下幾種人論時色數有。呂氏童蒙訓當宦者凡異色人皆不宜與之相接巫祝尼媪之類尤宜踈絕。異色人謂不務常

業之人五以上十字

曹山云 十學の注に據れば常業を務めざるを異人と云ふ常業を務むるを本色と云ふ字義分明なり

物色

碧巖錄十九 一日厨前拋撒米麪洞山超心曰常住物色何得作

踐如此。類聚四十七 金峰志禪師。禪客來參。師云甚處來。禪

客云泉州來。師云彼中物色如何貴賤。客云與此間相似。修

清規一七 如倉庫疎漏雀鼠侵耗米麥蒸潤一切物色頓放守護有

不如法者並須及時照管處置。西京雜記四 高帝既作新豐並移

舊社街巷棟宇物色惟舊士女老幼相携路首各知其室。文選二十

賦類物色部有風賦秋興賦雪賦月賦。三體詩。池鷺詩林塘得

爾須增價。况興詩家物色宜。後漢書列傳七 令以物色訪之注

以其形貌求之

曹山云 物とは万物である總て形ちある物を云ふ色は其イ
ロシナを云ふ又は風景に用ゆる事あり又は人物に用ふる事
もあり本色の條下と見參すべし

折水

敕修清規四十八日用規範云隨量受食不得請折又未再請不得

刷鉢盂又不得先以熱水洗鉢未折鉢水不得先收蓋膝巾不得以

餘水瀝地上折水想念偈云我此洗鉢水如天甘露味施與鬼神衆

悉令得飽滿 庵廕休羅細娑婆訶 傳燈廿六華嚴志逢大師章

云護戒神曰師唯有一小過師云何哉曰凡析水亦施主物師每常

傾棄非所宜也師自此洗鉢水盡飲之積久因致胃疾注凡折退飲

食及涕唾便利等並宜鳴指默念咒發施心而傾棄之史記高祖本

記八歲竟此兩家常折券棄責注古用簡札書故可折至歲終總棄

不責也 同漢書注以簡牘爲契券既不徵索故折毀之棄其所負

曹山云 喫飯次第に衆將に本飯を喫盡し飯頭行者第三番再
請と呼ふ即ち順追衆行者意に任せて盛る第四請菜と呼ふ衆
任意汁菜を喫す第五鉢水と呼ふ時飲湯を行き次て生水を廻
す衆鉢を洗ひ訖る第六折水と喚ふ桶を擎て逐一向前す。請
とは逆追の事折又棄とあり折水の偈に棄鉢水とあれば棄の
字を用ゆるも然るべし。隨量受食不得請折とは最初食に行
く時腹の分量をつもりて相應に受べし初に少し受けて不足
ゆゑ再請の時乞求して又初に多く受けて有餘り殘し棄る事
勿れと云ふ意なり鉢水に兩様あり熱水は飯の湯なり此は飲
むべし生水は洗鉢にある此は棄つるなり。正字通折字下曰
又毀棄也史漢高紀に券を折て賚を棄つ此意は折は折り棄る
也憑煖か券を焚棄てたる蒙求の標題に折券とあれば燒棄る
も折也字典には又毀也と注して易の説卦に閔を爲毀折を引

き又漢書の折券を引く等なり

絮叨 大惠武庫^{三十五} 雖然如是監宦大絮。大慧書^上 雖若絮絮亦

出誠之心。雲臥記譚^{九上} 有箇未後句當機雖禁制咄且不要絮。

了菴錄^{廿八下} 元來老子得與麼絮。綿衣志即日召袁彬語絮且泣。

類書纂要^{四十五} 絮々叩々言語太多也。品字箋云言語不斷者曰

絮叩曰聒絮。俗語話體絮煩。

曹山云 新日綿故曰絮精きを綿と云ひ麁きを絮と云ふ綿は

長して絶さるの貌意義にをいて多少差はあれども二字とも

に長して切れさる様子なり

還我 雲門錄^{二上} 問初夏未前程忽有人問如何祇對。師云大衆退

後進云過在什麼處。師云還我九十日飯錢來。同^{十五上} 問當今

一句請師道。師云放爾一線道還我一句來。同^{十八上} 一口吞盡

時如何。師云我在爾肚裏。進云和尚爲什麼在學人肚裏。師

云還我話頭來。頌古^{三十} 父母未生前還我本來面目來。武庫

十二 若要了死生底禪須還和尙若是擯花簇錦四六文章閑言長

語須是我洪兄始得。會元^{二十八} 這公案直須還透頂徹底漢方語

了得。

曹山云 此意は汝等に見性させようと思て一夏供艱して修

行させたに見性もせず九十日を空く送つた故に其飯代を還

せよとなり。還我の二字われにもどせの譯語本義なれとも

其方の手きわには六ヶ敷此方へ渡せ此方かして見せようと

の意味に見てよき處ろ多し

折合 勅修清規^{二十八上} 分孝服有輕重如無布絹隨宣折錢依之。尺牘

雙魚^{十四} 餽送贖儀類無物爲贈聊具折儀代申芹意。類書纂要

八以銀準折禮物曰折乾。又以銀折乾下程曰折程。全^{三十一} 不輕

不重謂之折。斷也衷當也。文献通考。宋熙寧八年鑄折二錢。全

宋衷州上言本州二稅請以金折納。論語顏片言可以折獄注古聽訟必須兩辭以定是非折獄謂判辨獄訟之事也。漢書貨殖傳注云以斤石稱之輕重齋則爲合以斗斛量之多少均亦爲合相配耦之言耳。雲門錄十五見成公案不能折合。洞山五位頌折合還歸炭裏坐。諸祖偈頌五下雲峰小參云汝一隊後生經律論故是不知也入衆參禪禪亦不會臘月三十日作麼生折合去。正宗贊南堂章生死到來作麼折合。應菴錄五下七黃面老子四十九年說一藏者乃至洎至未後省他無折合却對百萬衆前拈華附囑其誣之罪不輕。密菴錄三遮老子三登投子。九到洞山做盡計較未後却向龍山店裡打箇沒折合放聲道今日始是龍山成道。碧巖錄六十三則着語。大惠書五六。松源錄六上就可見曹山云折は物の輕重多少を判斷すると。合は輕重多少を較るとされは折合とは何にても品を代物にて過不なきよう

算用のツバメを合すと進物の品を料物にて贈るを折儀と云ふ。贖儀等樽代の類也餘は準して知るべし

檐閣 中峰錄十五那時燕鼻拽回頭始信從來自檐閣。同十五窮却

隨輪回。由來自檐閣。水滸傳四好歇兒檐閣。類書纂要十一

耽擱。唐話六耽閣

曹山云 檐閣耽閣は字形に抱らず同音なり擱の字々書になし是は俗稱にて詩文にはなき語なり其意は逗留ヒマガイル油斷してヒマの費す處により前後の文勢にて譯語を附すべし。耽は俗の耽の字ならん類書の注に過樂即ち面白くて圖らず時を費したる意なり

索價 枯菴漫錄上九千鈞上絃當時遼天索價一言道盡不合貽地相

酬。了菴三五只箇破沙盆索起遼天價。韓文五寄盧同少室山

人索價高兩以諫宦徵不起右文前集書言故事三十一李渤價高

要君厚聘而肯出仕兩次有諫宦之召不肯立起

曹山云 遼天索價とは資格もないのに掛價を云ふ恰も露店の商人の如してある韓文の意は中々諫宦などにては不足なり今一段も二段も高宦でなくては出仕せぬと高振りて居る

管取 碧岩錄^{十九} 諸人還有出身處麼二六時中管取壁立万仞。同

一八 倘若回顧躊躇管取挿觜不得。 虛堂^{四一} 者僧當時(中畧)各自散去管取藥山開門不得。 同^{四一} 當時者僧但冷笑一聲管取

洞山隱身無路。 七^四 管取法昌拔貧做富。 禪關策進無量普說

疑來疑去終日杲椿々地聞聲觀色管取回地一聲去在。 高峰示

衆疑團子欬然爆地一聲管取驚天動地。 古音示衆若能念々不

空管取念成一片。 吳江雪^{四上} 明日就到吳衙去作伐管取一說

便成。 同^{三十} 管教爾兩人相會不必悲傷

曹山云 其事と總理するを管領又管掌とも云ふ通俗に管は

うけありと譯し總てを支配するを管取と云ふ

心 朱子語類。 如人射一般須是要中紅心々々とは的の星を云

ふ支那の的は星を赤くする也心字を用ひしはマンナカと云

ふとなり武藝にて双方秘術を盡す譬にも應用するなり俗本

水滸傳に史進と陳達と鬪ふ處の但見の文に云く好手中間逞

好手。 紅心々裡奪紅心 (瑞巖錄)

光影 古抄云光影者謂非其實體我宗非本分宗師家之事咸謂之古

抄邊大論^{十六} 如影映光則現不映則无諸結煩惱遮正見光則有我

相法相影

塗糊 古句無端白紙強塗糊方語汚義塗は墨や土をヌルと糊はノ

リナツケルユエ墨土ナドナヌリマワシテヨコス義也

節目 禮學記善問者如攻堅木先其易者後其節目注節則木理之剛

目則木理之精

商確

確當作。擢音覺北史崔孝芬傳商擢古今間以嘲諷文選吳都賦商擢注商度也擢粗畧也言商度其粗畧也韓文聯句聖籍飽商擢

注謂評議

埋頭

一心にウツムき入て書を讀を埋頭讀書と云活法四五教子類三冬燈火埋頭讀萬里雲霄信步登寒山詩中にも出

末上

最初の義也唐土のしばいの初には小ツメノ役者出て藝をする也故にシグミ本の初に多く末上來とある也末は小ツメノ端役者也ヤツシを生と云女形を且と云立役を外と云敵役を丑と云チャリを淨と云唐土の梨園の役者の名目也類書纂要梨園樂工部に此名義を釋し云末者附始而言先出開場摠名也謂之末者反言之也これによつて末上は最初の義とす

孤單

ヒトリタビの人を孤單即ち孤同しこゝには片一方の義也と見るべし

探頭

ノゾキ見ると也頭をツキコンて家内をのぞくを探頭と云水滸傳第三回一個人探頭探腦在那裡張望又第四十回宋江揭起帳幔望裡面探身便鑽到門前探身入去などの語多し

進問

傳燈廿五僧欲進語會元十六再至進此語これにて進の義知べし諸錄問答の處に進曰とあるはス、メテとよむべしス、ンテとよめは進歩になりて大に非なり

媵含

媵音諸碧嚴七十六則着語諸含來福本作諸々含々圓悟錄媵含作諸含法華玄贊五若暗含與記菩薩亦得

打底

到底の義なり已下二字雲門語虛堂靈隱普說亦有打底不遇惡棘手段底宗匠坐在見地

忒煞

纂要廿七忒煞大過也太殺と通し用る也忒音匿なれ共俗語に入通し用ゆ煞は俗の殺の字

鬚鬢

字彙亂髮貌ガツソウアタマを鬚頭と云髮をソラズにいる

也

捷頭 捷當作捷捷捷捷捷並同行事抄資特記^{四上}之詳に此を論す今は拈槌執拂開堂演法のとを云

即當 俗呼小録に人之頽敗及身病摧靡なる者曰即當ヨボケルと譯すべし

鑰匙 禮記檀弓管庫の正義に鍵謂鎖之入内者俗謂之鎖須管謂夾取鍵今謂之鑰匙正字通鑰匙所以啓鎖者俗作匙按二字にてカギのと也但し鑰はエヒ匙はかぎにてエヒヂヤウノカギと云と也

峭措 禪林類聚^{四十一}作俏措彙俏措は好き貌人物のスイなり俊俏人物と云諸錄には一轉して峻峻の義とす故に俏字を峭字に作る處多し峭玉篇峻也措は措置の義か貞和集^{廿二}交牙 牙當作牙^{注廣韻}互俗作牙左思獨都賦長千延屬飛毫升互^注

棟宇交互周禮天官同會以參互考曰成交牙は入クンダとを云行李 左傳昭十三年行理之命^注使人通聘問者理李音同行李使也轉して旋の荷物のとを云徂徠が南留別志にユウリと云は行李也旋の荷物を云也

困頓 フチスエラレテ動かぬを季頓と云類纂^{九三十六}困頓^注困倦勞頓困頓皆な同じ意なり

圈攀 圈は鈎の云說文凡拘牽連繫者皆曰攀とあれば攀は鈎の索也韓愈元和聖德詩解脫攀索恩按方語解に論ずるか如く從容錄鹽官犀話頌扇子破索犀手圈攀中字有來由と云によれば圈攀切圈疊韻にて圈一字の義也今は圈套の圈と見て牧にて馬をとる套索の如くなるワナのと也大龜をつるには尋常の鈎は間にあわずワナの如き者にてマキトルべしされば轆轤也との説もミにくからずしかし轆轤は圈攀を引くものなれば

直圈攀をさすはひがと也西遊記五十回同五十一回金剛山の老妖圈子を以て孫行者が鐵棒那吒太子の六般兵器火德星君火龍火馬等を套てしまいと併せみるべし

斷和 古抄云天竺には國に必有斷數人若鬪諍あれば此人斷之兩方を和せしむる也斷理非後令和融の義なり

編辟 古抄事苑第二辟當作逼也私曰編韻會以編次物又列也此義によらば萬の物一方にアツメセマラセタ義か避逼ともに唐音ヒ日本ならた逼を碎とは誤るまじ

特差 ヲザク 仰せつけらるゝ也韻會差は使也新差住持勅差住持など

刀釘 いねをかる鎌を斫稻鏝と云鏝は苦結切説文鎌也釘は居列切音相近故に通用せしか或本のかきいれに鉛釘也とあり字典に此義なし鈎の字注に刈禾鎌曰刈鈎

文帳 百丈清規聖節^{二十一}蓋住持僧道歲^一供帳納免丁錢官給由爲憑故遊方道具道牒之外有每歲免丁由有何處坐夏由有啓散聖節由以備徵詰

捏訣 結卯の類捏訣念咒水滸西遊記に多出印相を結び神咒を修する貌なり

挨肩 群衆の中てをしあふを挨肩又は拶背と云今は肩を並べて佛祖に譲らぬ意なり

物色 人相がきにて人を尋ねる也後漢書巖光傳以物色訪光云云とあり

撮藥 藥を合也撮は指三本にてつまむなり右は匙を用ひず指にてつまみし也

盡然 興逆切傷痛也周書民罔不盡傷心 俗从血誤字彙血部但將去質庫中典也典得一百貫 典は質にをく也

看々 箭をきッてわなッた時をぼへたかと聲をかけるを看箭と云現前底の注意と見るべし

門僧 ナデイリの僧と云意なり攝家方へ出入する平堂上を門葉又門流と云と同意也

蠻子 アバレモノ。ワンバクモノと譯すべし蠻弟の無禮なるより云たる也むしやうにかのつよいを蠻力と云水滸傳に李達を蠻童と云もぶこつな丁稚と云こと也

一放 放は放屁の放也俗話人の言語を罵て放屁と云借脚 禪門寶訓拾遺作借脚夫脚夫は錢也とあり使ひ賃のことなり

籍沒 ケツシヨ也抄沒とも云籍は帳につけ立る也沒は官府へ没入するなり除名のことなり

去處 パシヨと譯す去の字無意西遊記六十回に此城名を喚祭塞

國乃西邦 大去處行到一所去處など

阿底 爹字彙丁邪切唐音てい底と同音廣韻北方人呼父爲爹阿爹はとゝさまをやじさまと云ふことなり

泊浮 をよく也泊當作拍樂善錄少年侍其善拍浮解衣赴水非泛不時之需泊浮御用金のたぐいを云ふ

取次 艸次と同じ卒爾の義會元十六石門紹遠禪師初在右門作田

頭門問如何是田頭水牯牛師曰角轉轟天地曰田中事如何師曰深畊淺種曰如法着師曰某不會取次江湖集村田樂意舞伴歌取次行

破手 破は過の義破手はひるすぎ也破曉はよあけすぎ也杜詩二月已破三月來虛堂寶林二月已過三月已來

委身 ちよッつくほうことなり憎蒼蠅賦委四肢而莫舉委はへつたりと下につける也

五陌 詩經注 行杖者曰五百本作伍陌注 伍當也陌道也使之導引當道陌中驅除者古今注五人曰伍五長爲伯故稱伍伯詩經注 あれば行列のつゑはらひ也畢竟は明治前の同心などの如し

頭陀 俗稱行者曰頭陀或道人出家の鉢を行して修道する名なり

白拈 白拈賊方語畫賊と注したるは類書纂要四五 白日撞入人家

見物便取謂之白撞賊と同義に見たる也白拈とは義異なり白

は双物の類を持ぬこと拈は指にて取物也と注すれば白拈は

無手にて人の物をとること也聯燈七 無位真人則下雲峰云臨

濟犬似白拈賊雪竇云夫善竊者鬼神不知既被雪峯覷破臨濟不

是好手無準錄臨齊贊云竊不見蹤敗不見賊是真白拈某誰與當

これはいつのまに誰がとつたやらしれぬやうに手目をみせ

ずぬすむを上手との意なればことごとしく双物さんまい

をせず人のしらぬやうにぬすむを白拈賊と云双物もたず戦

を白戦と云やわらて人を殺を白折白打と云日なたほこりを

白酔と云酒をのまずに酔た心地なる故也通鑑白論注猶空言

白望注猶虛名也行脚しなから參禪の志なくぶらぶらあるく

を州縣白踏僧と云其外白字白々走白酒など可併考

即忙 山菴雜錄作狼忙狼狼慌忙也即狼同音通用す石中立以員外

郎爲園外狼

短氣 楚辭九章氣於邑而不可止前漢成帝贊言之可爲於邑注於邑

短氣也前漢中山王傳爲之於邑注於邑短氣貌子典於氣邑迸結

不下也むねふさがる也希叟錄二結夏小參釋迦老子不善用心

掘窖埋人無一個出頭得只得短氣短氣むねんがりがなしかり

などしてむねふさがる也

影艸 探竿影艸未見明解人天眼目四喝注探竿漁者具也束鵜羽挿

竿頭探水中聚群魚於一處然後以網漉之謂也探竿用處本朝鵜

繩也影艸者刈草浸水中則群魚潛影然後以網漉之是渙者聚魚之方便也善知識於學者亦復如是明喻嘉言傷寒論論瘟疫條云范文正公守饒冬溫吏請禱雪公取薄水置座嘿坐久瑞雪滿空頃深三尺蝨賊疫鬼何地潛蹤耶可見先儒退藏於蜜借凝水爲影草已攝大地於清冷之淵矣詎非法王手眼乎

單丁 品字箋餘夫單丁也へやずみの百姓ひとり身の百姓なり孟子滕文公上餘夫二十五畝注程子曰一夫上父母下妻子以五口八口爲率受田百畝如有弟是餘十年也夫六別受田二十五畝俟其壯而有室然後更受百畝田云云單丁院はひとりずみの寺なり

含尾 尾の字つくと讀は尾にとりつぐ義也さきの舟のともへあとの舟の頭をつなひてだんだんにつゞくを含尾舷と云

碣斗 碣は山特に立の貌斗は斛と同音峻立なり突兀たる富士山

の如きなり

模糊 糝當作模字典模糊漫の貌杜詩駘皆錦模糊漫滅して見へわからぬ也茫々たる影色を云ふなり

化疏 化は灼化にてやくこと也火葬を火化と云やきばを化場化人場と云は請疏也唐土にて神前を詣て紙錢紙馬などをやきて神を告ること也こゝも呂公が言法華を請ぜんとして疏をやきて遙に告る也

因縁 紀談に作資縁忠國師碑文に青蘿資縁直上寒松之頂因資寅の三字此意の時通用す字典に資は進なり縁は連なりとりつぎまといふ也

抽脱 大小便すること也本義は袈裟衣をぬぐことなれども不淨を忌て直に云はぬ也

郷薦 及第する人を其處より都へ推舉することを云多くは仕官

に撰擧するなり

省闕 禮部の役所を南省と云及第の人を禮部の役所にて試るを
省試と云ふ試験のことなり

半餉 片餉と同じ一とかたけの飯を半分くふほどの間だ也黃梁

羊餉の故事なり

教化 大慧普說三の六十六十一にもあり皆勸化すること也俗語

に乞食を叫化子と云教叫同音化とワメク也今は宗教を以て
一般に及ぼすことに用ゆるなり

抽單 單は七尺の布單也自分の單をぬき出していぬる也跡をか

まわぬことなり

了又 了はをいわけの形なり了は么加切物之岐頭者とす漫錄八中

了又路即ち岐路と云ふことなり

椰檢 當作椰 字彙擧手相弄也人にカラカウことなり

喏々 人者切敬言也と注す唐土にて下等人が上等人に向へば必

と、唱ふ日本にてはア、と云辭に同じ

二膳 粥と飯と二度のぜんぶ也膳は具食也と注して汁菜のそろ

うたるを云齋の備へを云ふなり

悶々 満心也と註すむねのもやつくことむねいつばいになるこ

と也輯釋に老子を引は一向當らず又の苦悶と同じなり

御諱 英宗名曙天子存生には御名と云崩后には御諱と云王正言

か名曙なれども口に云ひ筆にかくことをいむゆへ御諱と註
したるなり

奪胎 他の託胎しているを奪ふ也按に海印ほどの人託生せば男

子たるべき也干化の日出生なれば胎を結成する間なき故し
ばし女子の託胎しているを奪ふたるならん十二因縁の次第

三には識四つには名色五には六入この三つは胎内の位也識

は託生の一念也名色の位には六根未具六入の位には六根具足也而出生す朱家の子六根既に具足して女身を成ず故に海印其識の一分を奪て女子といりかはりたるならん

枉坐 枉は枉屈むしつ也坐はかゝり合にて咎にあふことゑんざのこと也又枉は自らまげて罪人となる坐縲紲は牢に入ていることと、見ても可也論語雖在縲紲之中非其罪也

南詢 此時南方禪宗盛なり故に南詢せよと云也下に南遊とあるにて分明なり

打併 とりをくとりかたづけるとのけるなと譯す世説に屏當未盡能改漫錄に併當二字俗訓收拾圓悟心要打擬當作字典屏音丙除也去也付也併與屏棄之屏同とあり按屏併擬併五字音義通用す大慧武庫併疊數具とあるも同意なり譯文筌蹄打併併了他は結果了と同ウチ殺してしまふことなりと云は正義

を轉じて云也倭俗殺すことをかたづけるたゝむなど云か如し

回地 玉篇戸臥切音和牽船聲唐音をう重き物をひくゆへ思はずをうと聲がてる也

聲訛 いりくんでむつかしきとを云中峯録音釋不平易貌とあるは進學解佶屈聲牙韻會聲牙言辭不平易と云による也訛は吾禾切牙五加切音相近祖庭事苑該訛上は正作殺溷殺雜也下謬也圓語錄註聲訛謬戾也あはせ考べし

五參 五日一參の義也百丈清規住持章有五參上堂校定清規如初五初二十廿五此四日謂五參上堂五日め五日めにして上堂ありて月に六日なりその内且望祝聖上堂を除き四日を云且望の上堂もこもりてある也

後架 昭堂の後に在り大衆洗面の處也又東司にも後架あり架は

たな也洗面の器ををく處也倭俗雪隠後架と云はこれより出たるなるべし

結甲 なかまを組むと譯す五人ぐみを五保人或は保甲と云くみ頭を甲頭と云

一覺 覺去聲ひとねいりと譯すひといきぐつとねいること也一ねいりして目さめ身動きするを一覺身動と云こと

不合 合堂のうらなればすまじきことにかふするはづてわないにと後悔する辭也一段きびしく云へば千不合萬不合など云也

圈績 圈績にも作るワナテクダと譯すべし雲門錄中落袈裟績

六物圖廿本五 鈎紐の傍注に前の鈎後の鈎收束便易云云

鈎は袈裟の環なり紐緒也同會釋廿二紐績也字典績字注玉篇紐績也急就篇注績亦條組之屬又績字注紐也又績字注釋名困

縋也藏物縋縋束縛之也縋縋厚意也按縋績の二字にて袈裟の緒のことになる也諸錄圈績とあれば圈は即のことなり唐話纂要圈套ををとしあなと譯す心要廿七跳出圈圍

爆地 はつちりと譯す豆の灰の中ではぢけなどする聲也爆唐音ほ字彙烟火の破裂又は地雷の破裂と見てよし

截路 ツマリミチ也斷頭路とも云きたる路と云意也敵の路に立ふさがるも截路と云路をきる意也

撐々 撐地也きつとふみつける也武庫晦堂語作四足踞地動かぬ形様たり

支梧 作支吾枝梧通雅支柱抵梧也史記項羽紀注小柱を爲枝邪柱爲梧文選左支右吾

承當 兩芳洲云承當不起言才力不堪也又物を心得たとうけあふを満口承當すと云又重き荷物を能もちこなすをも大事を能

あぐま^ず取行ふをも擔當と云又役をつとむるも承當と云水
滸傳承當^{星正}居家必用^承受納其事也無準錄^上我石田師兄末
後句子固不容易分付而無庵居士亦不容易承當故に記語一定
しがたし

驢年 玉篇驢似馬耳長故うさぎむまと云なり丑の年を屬牛と云

午の年屬馬と云屬驢の年と云は一向なきものなり

麻繩 ワラジノヒモを鎖鞋繩と云万花谷に出す苧にて作つたわ

らじのひもを麻鞋の綱繩と云本草に出す故に麻繩か水につ
かれれば一歩々々にしまつてくる也請益銀の股と之は繩のよ
りあわせめのこと也鞋のことに拘わらず

站在 字典に站は久立也俗に言獨立也俗語站在那裡あそこに立
つて居る畧站遠此にはちとそちへよつて立て居やれ也
性燥 氣をいらち腹立を焦燥と云こゝも其意也又一轉して伶俐

のことにもなる大慧書躁作る躁は急進也不安靜也

追索 追は其家系ゆくこと索はとりか系すことなり又追もとり

かへすこと也水滸傳楔子大尉大怒て指着道衆說道す云云把
備都追了度牒刺配遠惡軍刎受苦

老婆 俗語妻を老婆と云年の老少にかゝわらず和俗のかゝと云

辭にあたる某是某的の老婆など云小説に怕老婆經と云あり
かゝをこわがる御經と云義也妻呼夫曰老公

至扣 扣與叩同擊也又問也發也禮學記善待問者如撞叩之以小者
則小鳴叩之以大者則大鳴これより轉して問の意になりたる
也至扣至極扣問云說是也標注叩頭の義を引わ非也

草料 まぐさ也まぐさをあッめてをく處を草料場と云學者を牛
馬にして云たる也字典に料は牛馬所食芻豆也

莫道 さてをきと譯す勿論と同じ次の句の便是はたとひと譯す

莫道云云便是云云也云云此語勢水滸傳などに甚多し又便是の字也の字を次下承ぬこともあり

攝持 狐狸などにつままれるを攝せらると云西遊記三藏法師諸の妖魔にとられる處に多た攝持去とあり

落草 草裡靦落草崙草裡漢など向下にくたるを云又す人中間へいるを落草と云水滸傳に多く出す下賤に落る意

朱紫 二義あり一は高位の服色一は紫之奪朱の意朱紫交競異説相騰の語あり後漢陳元傳夫明者猶見不惑於朱紫猶聞不謬於

措大 資暇銀代稱士流爲措大略中愚以爲四說皆非也止言其能舉措大事而已事苑二十言措置天下之大事者謀野集刪注秀才稱措

大以其舉措大道也

不憤 杜詩不分桃花江勝錦注解不分不忿也正是忿音憤雲在嶺頭

閑不徹水滸四十八回花榮拈弓搭箭不端不正把那碗燈射將下來など不字きびしく云意也

點破 爾雅註以筆滅字爲點字をけしてなをす也點窺點易治點皆詩文をなをすこと也破は看破識破讀破などむつかしき處見

ひらき見ぬきなどするを云説破はいひくづすいひやふる也點破の字右の意にて解すべし詩文に限らず何にてもなをし

くすゞことけしつぶすこと也

支遣 支は收支の支にて扶持米をわたし拂ひ方ゑ錢をわたすこと也遣は排遣にて支遣外へはらひやること也又支吾支撐の

支と見てつゝはりのけてよセツけぬと見ても可也則箇 俗話語の餘聲也武庫惜爾則箇そなたがいとしいわいのう

水滸救我則箇たすけて下されのうと云意也則箇のうと云處にあたる也唐人通事の口傳上を重く云ときの語也

一節 節は操也我志操を守りて變せぬを一節と云畫錦堂記出入
將相勤勞王家而夷險一節蔚林盛事下布素一節は一生きぬけ
色のものをきこと用言なり

主張 莊子十五孰主張是孰維綱是張設也纂要十九作主也一人して
引ウけとりもツことうしろ立になッてさばくこと也

寄聲 書言故事十九朋友以音問見及日蒙寄聲又は親しく音ッれる
なり

閤使 事文類聚新集三十九東西の上閤門使凡取稟旨命供奉乘輿朝會
游宴群臣蕃國朝見辭謝糾彈失儀之事

經生 佛祖統記向隣寺召經生未逾旬日經已寫畢又寫經手と云さ
と

踉蹌 俗語に酒にゑい或はふちすゑられてひよるひよるするを
踉々蹌々と云具ひの付かぬことなり

蹉過 錯過も同じ蹉は足跌也と注すけつづつく也

還々 還はまたと訣すやはりの意也またクチコエするかと云
を還敢應ずと云對朕者誰と云さゑあるにまだ不識などと馬
鹿をつくすかと也評に已上の四句にて措定一則公案因茲已
下は頌出事跡と云へり

盤礴 第四則頌評透得公案盤礴得熟第七十則頌評宛轉盤礴七十
一則盤礴滔々地こゝは自由自在に劍を使ふ意也莊子由子方
書史解衣槃礴オカシカ贏林注箕踞之狀わがまゝなる貌也これ本據也
措定 措當作楷廣韻楷式也法也又楷抹の義也サツハリとヌグウ
テトツタと云意か評に四句頌盡公案了とあり

名邈 邈當作貌正韻描畫人物類其形曰貌しかるに諸錄に多く邈
に作る必しも改むべからず正宗贊洞山章邈得先師眞
鉤頭 鉤はハカリのカギ也識取鉤頭はカギニカケタ處で合點せ

よ定盤星をあてにするな也

往々 毎度の義杜詩 醉中往々愛逃禪又處々サキ々々の義蘇廷詩

往々花間逢綵石漢書往々而有注言處々皆有之

怎生 作麼生と同字彙に怎俗語辭猶何也

頓絕 頓挫の意シャントキリアゲルと譯すべし

交加 うわが上る入ちがゑて重なつたことを云樹木のしげりて

枝と枝とが入ちがふ貌をも云

抜本 本は本錢モトデ也抜本はモトテをとりかへす也モトテを

失ふを折本と云又消折本錢と云

油糍 ゴマモチ也事苑餠餅注胡麻即油麻也モチダンゴの類を糍

糍と云字書に此二字なし唐音にて胡はハ油はハなり

合子 曷闇切正韻合子盛物器盒にも作る

胡餅 釋名曰胡餅作之大漫匝也又以胡麻著也

喃々 玉篇呢喃ば小聲多言也

傷慈 慈悲すぎる也慈悲にキツがつく也

猱人 傳燈^{十四}藥山一日看經次柏巖曰和尚休猱人得也南院錄師打

禪床僧便喝師拈捧僧曰老和尚莫掣猱奪棒打老和尚去在禮記

樂記及優侏儒獲如雜子女^注鄭獲獼猴也言舞者如獼猴戲也亂男

女之尊卑^音獲乃刀切亦作猱^注朱獲與猱同古抄樂記の鄭注を引

而戲弄ずる義なり可從

見成 現今成就の義にてデキアイと譯す見成飯など

惹得 事を仕出すを惹得と云若留住在家中倒惹得孩兒們不學好

了又すをかひそびき出す意にもなる也他は是個の大蟲不是

好惹的など

貼秤 ハカリに重くかけてやる也十文目の處を十一二文目にカ

ケコンデやる也又ツリ銀を貼銀と云ヨクイの分をモドヌゆ

へ也會元^{八十一}信宗顯章上堂舉中邑仰山六窓獼猴話云我與爾說此譬諭中邑大似箇金師將一塊金來使金使酌價金師盡價相酌臨成交易賣金底更與貼秤金師雖然聞喜心中未免偷疑何故若非細作定是賊賦

平出 會元富那夜奢章馬鳴曰我欲識佛何者即是祖曰欲識佛不識者是曰佛既不識焉知之乎祖曰既不識佛焉知不是曰此是鋸義祖曰彼是木義祖問鋸義者何曰與師平出馬鳴卻問木義何祖曰汝被我解馬鳴豁然省悟

偏枯 大德濟陰方上半身偏虛風乘氣入爲偏佔御去 銜はクワエルと譯す鳥銜花 盃など酒をのむに盃のふちを唇にてハサム是くわゑるきみ也

限刀 左傳僖二十五年注限隱蔽之處雲門錄中身限韶陽之雲首變楚山之雪とあればカクレノガルの意あり限刀はハツシカワ

スを云又字彙烏魁切音威威と回と唐音ナイ也古抄云限與回音通故に回避の回とみるべし回避刀箭の互文の意なり會元^{十六}作限刀避箭回の代りに限を用たるはカクル、の意を含たるなるべし月中巖文明軒雜談我等在熬釜中煎而逼之如何畏避畏唐音をい欠水滸傳七十六回備這等懦弱の匹夫畏刀避劍兇生怕死これ亦回と通し用ゆ

胡盧 唐音^ト旛が風に吹かれてふう々々と云音なり 駕與 ノセテヤルと譯す駕は車に馬をつけること也今青龍をツケヤツテも其車にゑのらぬなり

分付 ワタス也又屬付と同クイ、ツケルと云ことにもなる也 七寸 蛇のクビスジ七寸の間は要害處也埤雅南方多蛇精嘗化爲人以呼行旋の姓名若願應之夜必至棲所傷人土人養蜈蚣於枕中臥覺有聲則啓枕放之蜈蚣乃疾馳蛇所啗其腦云云

一小説にこれを引て腦を七寸に作る

鐵券 五代史朱友謙降莊宗拜尙書令賜鐵券怒死罪宣旨を鐵の板

に鑄つけて子孫に至るまで死罪を恕さるゝ也水滸榮進力事

にも見ゆ類纂^{四五}鐵券注按鐵券之形如瓦面刻語文皆鑄免死俸

錄之數字嵌以金

不平 常話路見不平拔刀相助と云は男立の氣象を云第一百則頌

評云古有俠客路見不平以強凌弱即飛劍取強者頭

合開 大家合壘來相開也そうくがより合てヤカマシクいふ也

風措 風流の義となすは恐は不可ならん下の宛轉自在と照しむ

れば風指なるべし指當作措又措指音相近し唐音いつれとも

は也但し指は上聲措は去聲撮口呼のちがいのみ

金牙 福本作須是金毛獅子始得こゝも解の字にて句を切べし會

元六不是金牙作爭彎弓解射尉遲古抄云金牙天衣懷錄に出來

考

無端 アツタラコトと譯す無端白紙強塗糊

呼蛇 瓢子を吹て蛇を呼こと未考淵鑑類函蛇部引弟堅志意少異

なり

陡暗 字書無陟字當作陡正韻頓也

喫緊 カンヨウ或は大事のことと譯す中庸大全に喫緊は猶俗言

着急喫は喫顛喫驚などの喫の如し緊は要緊也沒要緊 不打

緊は大事ないと譯す

噴地 噴は普悶功殺鼻也クツサメのこと又吐氣也思はず笑ふこ

とを噴飯滿案と云ふめしをふきだす也唐音 ホエンなれば

噴地は ほんとふきだす意にて勢のある形容也

端的 端正也的實也と譯す眞實正眞實正等の義ホンノと譯すべ

し端的是好那箇是端的底觀音など

惺々 靜中不昧曰惺大慧書百不思時云惺々

跳下 跳はヲドルと譯すれどもヒョイトとぶこと也蝦蟇跳など

拵取 拵俗拵字棄也拵取はかまわぬほつてをく也杜詩久拵野雀

如雙鬢

撒向 撒は引也佛也と注す俗にスツルことを云永字八法第七畫

のこを撒と云もヒキスツル義也

由他 かれしだいあなたしだいと譯す二字病活死乃至鑊湯爐炭

まてかゝる數箇の也得の字即ち由他の意

認取 識取と同字彙又識物也水滸傳認得我麼識得俺麼を同じこ

とに用ゆ見をほゑているかの義也今はそれより意重し

抱操 字典に抱懷愁也と注してムチャクチャと氣の結ほれたる

やうな意也

指望 指はゆびさすなれば何ぞアテナシテ願ひのぞむこと也

漆桶 無明にたとえたるなり紀談四下大慧偈寄語叢林踏漆桶物の

わからぬ人を罵て糊突桶と云漆桶不會など云は方語に無分

曉とある其意也

四休 四唐木作匹書銘語に玉拜手稽首曰公不敢不敬天之休來相

宅其作周匹休

進期 進は入の字の義也入寺を進寺進院と云諸進便室など

挪抄 挪は搓挪と連用して繩などをなふ意也抄は摩抄也手接抄

する也と註してモシナデる也挪抄はスリコスルと譯す

采着 類書纂要歛保看顧也不歛不保かまわぬと譯す

端倪 莊子出類書纂要端倪猶端緒又究端倪辨端倪などは皆其

はしくれを見てとつて全躰を知ること也從容録音猶端的と

云は大意を取たる也

兀坐 十補韵會兀々不動貌按玉篇机音兀本無枝也集韵木短出貌

木の枯て枝葉もなく幹ばかり立たるをタチクイと云也兀も同音にて此義を取也痴兀もこの意也

遼空 碧巖一鏃透空虛堂錄遼空一箭皆遼天と同じ意也事苑遼天

注遼當作捺捺取也遼遠也非義按捺掠掠並同音にてスリユスルこと也遼空而行は何もない處をすりこすて通るの義也大なことを云ふを捺天的活と云鼻孔捺天西湖佳話九出す

拍盲 拍は手のひらにて物をうつこと也盲人は獨行できぬゆへ

人の肩に手のひらを打かけてあるく故拍盲と云今はたゞむかう見ずにと云義なり

賺悞 賺音暫字彙重賣也故に人をダマスことを賺と云字彙又錯也賺悞は人をだましシクジラス也

穿下 穿は串と同音通用往來する義也穿州過府など

乾慧 通教十地の初地日乾慧謂外凡伏惑位無聖觀慧雖巧斷惑智

水乾燥今は此義に非ず雪峰の意因定發慧未得行持之水謂之

乾慧 有補

片嚮 嚮古文向字向餉音同片嚮是一片餉也めし半分クッうち也

半餉とも云暫の間を云

落索 絡索にも作る同音通用也繩索の義に非ず形容字也ゴタゴタした物と譯す大慧書抄に一絡索は一結也と云たるもゴタゴタした物をひとからげにした也

葛藤 叢林盛事富鄭公曰禪家者流見說事不經直者謂之葛藤言文字言句也

撒手 手をナツハタゲル也撒は物をマキチラスと也

椿定 椿概也と註椿定はクイウツタル如く動かぬ也

擺手 大手をフルと譯すシサイラシク肩をふり手をふつてあるくを搖々擺々と云